
【習作】SDガンダム G Generation World ~逆襲の赤き鷹~

アヴェンジャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【習作】SDガンダム Generation World
～逆襲の赤き鷹～

【Nコード】

N8311R

【作者名】

アヴェンジャー

【あらすじ】

ザフト軍エースパイロット『ルナマリア』ホーク。彼女が身を投じた戦いの行方は。

これは先日作者が投稿した短編を改めて連載とした物です。駄文とキャラ崩壊の塊ですので、そう言った物が嫌いな方は直ちに『戻る』をクリックして下さい。

第0話「専用機って大体量産機ベースな事が多い」(前書き)

Gジェネをプレイしていたらまた思い付きました！

ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですw

感想・指摘をお願いします！

P・S・アンケートを受けて連載に切り替えました！

これからも宜しくお願いします！

第0話「専用機って大体量産機ベースな事が多い」

とある宙域

「フッフッフッ……」

ザフト軍の戦艦『ナスカ級』のブリッジで、赤い軍服にプリーツスカートと言う変わった格好をした1人の少女がそんな笑いを漏らした。その表情はまるで悪巧みが成功した子供そのものであり、彼女を年齢より低く見せるのに貢献していた。

「苦節7年、漸くこの時が来た……。監督と脚本のせいで散々な目に遭ったけど、その鬱憤を今こそ晴らしてやるわ！」

「お姉ちゃん、何の話をしてるのよ……」

何時も以上にハイになって何やら私怨の籠もったメタ発言をしてる姉を見て、ブリッジでオペレーターをしていたツインテールの赤毛の少女が呆れた様な口調でツッコミを入れた。無理矢理付き合わされたのもあるのだろう、その表情は明らかに『私は不機嫌です』とでも言わんばかりの物だった。

「こつちの話よ。それよりメイリン、『招待状』は？」

「さっき出したわ。けど大丈夫なの？ お姉ちゃん、ついこの前コテンパンにやられたばかりなのに」

「思い出させないでよ！ あのせいで『私の』ザクは永眠する事になったんだから！ 折角の専用機だったのに……！」

いや『私の』って、と思ったがメイリンは突っ込むのを止めた。暇さえあればピカピカに磨く程に愛用してたMSをアツサリ破壊され

れば、そんな気持ちにもなるかと何となく感じたからである。決してキャラが崩壊している姉の相手をするのが面倒臭いからではない、断じてない。

「兎に角、今日はその雪辱を晴らしてやるわ！ 見てなさいよ、フリーダム！ アナハイムが作った『最強のザク』でアンタを倒してやるんだから！」

右手を強く握り締めながらそう呟く少女 ザフト軍エースパイロット『ルナマリア』ホーク』の見えるスクリーンには、全身を赤く染められた巨大なモノアイの機体が映っていた。

~~~~~

「呼び出しがあったのはココか……」

モニターに示された座標を確認して『フリーダムガンダム』のパイロット、『キラ』ヤマト』はポツリと呟いた。周囲には宇宙特有の無明の空間と只漂うだけの隕石のみが存在しており、何とも言えぬ寂しさを醸し出していた。

「それにしても……今時『果たし状』って……」  
<フリーダムのパイロット、お前に墜とされたザクの恨みを晴らしてやる。呪われたりコレ以上のネガティブキャンペーンをされたくない。なかつたら指定したポイントに来て！>

内容を見て呆れた様に呟くと共に、キラはコクピットに置いていた紙を手を取った。こんなやり方の好きそうな人物がユニオン軍若しくはアロウズに1人いるのは有名な話だが、書くと長くなるので割

愛しよう。

「ザクの恨みって言われても……。ザク程度なら通算で1237機も墜としてるからなあ……。一体ドコの誰なんだろ？」

ザクの愛好家が聞いたら一斉にアンチスレッドを立てそうな独り言を呟きながら、キラが果たし状を元あった場所に置こうとした瞬間。

『警告音と同時に彼目掛けて艦砲並のビーム砲が襲い掛かって来た』

「ッ！！！！」

咄嗟に身を翻す事で難を逃れると共に、今度はそれが続けて襲い掛かって来た。当たれば一撃でMSなど蒸発させられるであろうそれは、しかし目標であるキラにはまるで当たらずに周囲の隕石を消し飛ばして行った。

「機影は……。1機！？ このサイズはMAか！」

回避行動と同時にレーダーで敵機を確認したキラは、己の得た情報に驚愕した。果たし状を送られた以上攻撃される事は覚悟の上だったが、まさかMAで襲って来るとは夢にも思わなかったからだ。

と。

<良く来たわね！ フリーダム！>

不意に通信回線が繋がり、キラの耳に1人の声が飛び込んで来た。声の高さからして自分と同じ位の少女だろうか、ドコか勝ち気な印

象を感じさせた。

< 覚悟しなさい！ この『ザク50』で、アンタに永眠させられた  
私の』ザクの仇を討たせて貰うわ！>

「君は……ッ!?」

一方的に為された通信と共に、キラのしているモニターに1つの巨大な機体が映った。

全身が真っ赤に塗装され、ザクその物の頭部を備えたMAだった。宙間戦闘を想定しているのか脚部らしき物は無く、代わりに2本の長い腕がその存在を主張している。胸部にはそのサイズに見合った砲塔のような物が装備されており、先程の砲撃と併せて凄まじい威圧感を放っていた。

~~~~~

「喰らえー！ーッ！ー!!」

< 砲撃戦闘をメインにしたMA……。けど、そんな攻撃が！>

瞬間的に放った砲撃を巧みにかわしながら、フリーダムが自身の携行しているビームライフルをザク50へと連射する。『不殺』を絶対の信条とする彼の狙いは無論存在感を放つ砲塔と関節部。武装を封じて一気に無力化する算段で放たれたその攻撃は、

「相変わらずね！ けどッ！」

< なっ……ビームが!?!>

不意にザク50の周囲に発生したフィールドに因って機体に触れる事無く掻き消された。

「この機体は『最強のザク』！ そんなビーム、100発撃たれたって傷1つ付かないのよ！」

フィールド。それがルナマリアの乗機を守ったフィールドの正体である。一部の大型MAや高性能MSに搭載されているそれらはビーム射撃に対して圧倒的な防御性能を誇り、場合に因っては艦砲の直撃からですら機体とパイロットを守る事が出来る。

強力な砲撃性能と防御性能。『アナハイム・エレクトロニクス社』
と言うMS開発の大手の思想信条を体現したその機体は、紛れも無く『最強のザク』の名を持ってルナマリアの力となっていた。

「墜ちろッ！！！」

裂帛の気合と共に、再び砲撃を行う。だが狙いはフリーダムではない。
い。

『その後ろに漂う、大き目の隕石だ』。

くっわッ！？ しまった！>

キラィヤマトの動揺を掻き消す様に生じた爆音と共に、無数の石飛礫ぶてが続け様にフリーダムに襲い掛かる。濃密な弾幕と化したそれらは異常な機動を誇るフリーダムを不意打ちし、激しく白いボディを振動させた。

「貰ったアーーーーッ！！！」

その隙を狙ったかの様にルナマリアはスラスターを噴かし、サイズ

に見合わない速度で一気に距離を詰める。同時に両腕部に巨大なビームサーベルを展開させ、そのままフリーダムへと振り下ろした。それは完璧と言って良い連続攻撃。相手が並のパイロットであれば、恐らくそれで決まっていたであろう。

そう、相手が『並の』パイロットならば。

<クッ！>

「えっ!？」

瞬間、フリーダムは信じられない行動を取った。最早対艦用と言って良い大型のサーベルの僅かな隙を縫って回避し、ザク50の死角に回り込んだのだ。

「!」のッ、ちょこまかとッ!!!」

鬱陶しそうに吐き捨てると共に、ルナマリアはフリーダムを捕捉すべく巨体を動かす。だが機動性も小回りも勝るフリーダムはその裏を搔く様に機敏に動き回り、逆に彼女を翻弄した。

そして。

<はあああああッ!!!!!>

「ぐっっ……!!」のーッ!」

武装の死角に回り込まれた事にルナマリアが気付いた瞬間、ザク50の左腕は胴体から斬り離されていた。それに因って生じた身体を揺さぶる激しい振動に耐えながらフリーダム目掛けて砲撃を行ったが、それは只空しく漆黒の空間を切る以外に効果を発揮しなかった。

<これでッ！>
「きゃあッ！」

流れる様に振るわれたサーベルが、右腕すらも斬り飛ばす。それに合わせて先程以上の振動が機体に奔り、コクピットに砲を無力化しているフリーダム姿が映った。

「こ、このザク50が！？ ……き、今日の所はココまでにしてあげるわ！ ……けど……何時か必ず『私の』ザクの仇は取るからね！」

危機を察して捨て台詞を残すと、ルナマリアは素早く機体から脱出した。フリーダムも目的を達した為だろう、ルナマリアを追う事はせずにそのまま何処かへと飛んで行った。

~~~~~

ナスカ級

「あーっ！ 悔しいーっ！！！！」

自室の椅子に腰掛けながら、ルナマリアはやり場の無い怒りをぶつけた。余程悔しかったのだろうか、先程からしきりに机を殴る音が響く。

<やっぱりフリーダムは手強かったわね……。お姉ちゃん、もう止めようよ。コレ以上やってもこっちに損害が出るだけよ>

言葉通りの表情で、ブリッジにいるメイリンがモニター越しに彼女を説得する。実際今回破壊されたザク50は相当な資金を投じて造

られた機体であり、一兵卒故に懐に限度のある彼女にはかなりの痛手となっていた。

だが。

「ふ、フフフ……。何言ってるのよメイリン。私は諦めないわよ……。『私の』ザクの、『クロノ』の仇を取るまでは！」  
くく、クロノって……。お姉ちゃん……。MSに名前付けてたの……？>

予想外の台詞と共にその説得を跳ね除けると、ルナマリアは席を立った。

「メイリン！ 次のMSを発注して！ 今から暫くそいつを使って戦って、思い切り改造するから！ フッフッフ……。見てなさいよフリーダム！」

自分の暴露にドン引きしている妹にそう命じると、ルナマリアは部屋を出た。

これからどんな戦いが彼女に待ち受けているのか、それは誰にも分からない。

第0話「専用機って大体量産機ベースな事が多い」（後書き）

SDガンダム Generation World を未ブ  
レイの方への解説

ザク50

型式番号：MS-50

SDガンダム GenerationシリーズのオリジナルM  
S。

アナハイム社の試作MSで、同社がU・C・0130記念の『一年  
戦争終結50周年イベント』に出品すべく開発したコマースャル・  
モデル。

当時MS開発でライバルであるサナリイに遅れを取っていたアナハ  
イムが実績と開発技術力をアピールする為に開発されたと言う経緯  
を持つ。

外観はジオン系MSを意識しており、当時としては珍しいモノアイ  
搭載機。またそれに併せて型式番号もジオン系列の物を用いている。  
当時としては大型で、外見も人型とは言い難い。また量産を考えず  
技術力アップルを重視して開発されている。

武装は両腕部に展開する大型ビームサーベル（バリアーとしても展  
開可能）と胸部の大型メガ粒子砲。

## 第1話「ガンダムってチート機が多いと思う」（前書き）

### 読む上での注意

- 1 ・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですw
  - 2 ・と言うか他のキャラも崩壊していますw
  - 3 ・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですwww
  - 4 ・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
  - 5 ・字数少な目です。物足りないかもしれません。
- 以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を  
お願いします！
- P・S・アンケートを受けて連載に切り替えました！

コレからも宜しくお願いします！

## 第1話「ガンダムってチート機が多いと思う」

### ナスカ級戦艦

「これまでの粗筋　　何やかんやで愛機の『クロノ』をフリーダムに破壊されたルナマリアさんは、仇討ちの為に頑張るのであった」  
「お姉ちゃん、主人公がいきなり粗筋を語り出すとかメタ過ぎるから。て言うか何やかんやつて、そんな適当な粗筋聞いた事無いんだけど」

ザフト軍の宇宙戦艦『ナスカ級』の一室で、2人の少女がそんなやり取りを交わしていた。突っ込まれた少女　　『ルナマリア』ホーク』は『激論！　アツガイ対カプル　真のマスケットMSはどちらか！』などと大きく表紙に書かれた雑誌を読みながら先程のメタ満載な台詞を告げており、やる気が見えないのは明白であった。

「いやあの、こう言うのは私も作者もやった事が無くて勝手が分からないから。それに大体粗筋なんて皆読み飛ばすだろうし」

「開き直ったよこの人！　こんな作品に目を通して貰ってるって言う感謝の意が全く見えないんですけど！」

あまりに好き放題な行動を取る姉に半ばキレ気味になって、もう1人の少女　　『メイリン』ホーク』が机を叩きながら突っ込んだ。あまりの衝撃に机から嫌な音が聞こえた様だが、恐らく気のせいであろう。

「それはちゃんとしてるわよ。だからこうして次に乗るザクを選んでいるんだし」

「なら良いけど……。でもお姉ちゃん本気なの？　モノアイ搭載機

のみであるフリーダムを撃墜するって」

ルナマリアから現時点で自分達が入手可能なMSとMAの書かれた分厚いファイルを確認しながら、メイリンは姉に問うた。ファイルには赤いボールペンで幾つも？印が付けられており、その全てがルナマリアの仇敵とも言うべきフリーダムと同じ『ガンダム』の名を冠すMSだった。

「勿論本気よ。そうでないと、仇討ちの意味が無いし。それに、私のこの行動には『クロノ』の仇討ち以外にも大きな意味があるの」「意味？」

怪訝な顔をする妹に対してルナマリアは続けた。

「最近のGはやり過ぎなのよ。やれトランザムだ月光蝶だツインサテライトキャノンだって、あんなの戦略も何も無いじゃない。出した時点でこっちは10機1束とかのレベルでやられるんだから堪ったモンじゃないわよ」(全て彼女の私見です)

「それがGのファン達の醍醐味の1つだと思っただけ……。まあ確かに最近のGって凄いいよね。ユニコーンのビームマグナムなんて掠っただけでもMSを吹き飛ばせるって言うし、ダブルオークアンタなんて数え切れないELSを相手に『対話』してる訳だし」

「凄いつて言うかアレよ、チートなのよ。そんなチートをザクで1回ガツン！ って倒せば、世間のザクに対する『やられ役』って評価も改まるでしょ」

「成程……」

席から立ち上がりつつ述べられた姉の述べた持論に『一理あるな』と納得して、メイリンは近くにあった席に座ってもう1度資料を見直そうと再び開いた。

と。

「ん……何これ？」

そのファイルに栞の如く挟まれていた紙が1枚床に落ち、メイリンの気を引き付けた。

「!? ちよつ、それは……！」

彼女の動作に気付いたルナマリアが、慌ててそれを拾おうと駆け寄る。だが目標物がメイリンの足元に落ちている以上、どちらがそれを拾い上げるかは明白だった。

「何々……投稿者『赤き鷹』さん。『友人(男)が拾って来た犬っ娘に夢中で私の誘いに見向きもしません。どうすれば良いでしょうか?』」

「あ、いや……その……」

しどろもどろになって口籠もる姉を無視してメイリンは続きを読む。その声は感情が籠もっておらず、姉を見る目も白い目になっていた。

「回答者『武士道の極み』さん……『愚問だな。見向きもせぬならその視線を釘付けにすべく奥義を披露すれば良い』。回答者『汚名挽回』さん……『力だ！ 力を見せつけりゃそいつもアンタに振り向くさ』。回答者『蛙軍曹』さん……『腐る物は腐らせ、焼く物は焼く！ 邪魔をするヤツは皆消せば良いのよ!』。回答者『エターナルの歌姫』さん……『簡単ですわ。邪魔なら謀殺してしまえば……』」

「ち、違うの！ コレはあの、世間の考え方を把握する為の所謂1

つの調査であって決して他意は……」

必死で弁明する姉の額に、妹の強烈な頭突きがヒットする爽快な音が室内に響いた。

「それで、もう乗る機体は決めたの？」

「う、うん……。もう搬入作業は済んでるから後は乗るだけ……。アレなら性能も良いし、ザク50と違って小回りも利くし」

必殺の一撃を喰らってノックダウンしている姉に対し、メイリンが落ちた帽子を拾い上げながら問うた。それによろよると立ち上がりながら返答すると、ルナマリアは告げた。

「今度は負けないわよ、フリーダム！ 『全世界モノアイ愛好会』1番隊隊長の名に懸けて、この『ザク？』で仕留めてやるわ！」

~~~~~

10分後

「で、やっぱりやられたと」

ブリッジのモニターに映る満身創痍のザク？を見て、メイリンは溜息と共にそう零した。手元にお茶菓子がある事を見るに、この結果は予想していたのであろう。中々に賢い妹である。

「くし、仕方無いじゃない！ 機影確認と同時にいきなりミーティアで一齐射撃して来るなんて！ あんなのどうやって避けるのよ！>」
「汚い流石フリーダム汚い」

両手足を破壊されてダルマ状態になった機体を必死で動かしながら、ルナマリアはメイリンに向かって叫んだ。殆ど秒殺だったのが余程悔しかったのだろう、その瞳はやや涙目になっていた。まあ視界の殆どを埋め尽くすビームの一斉射撃を受けたのだから、それでも仕方無いのだろうが。

「お姉ちゃん、やっぱり性能だけじゃどうにもならないわよ。こっちも助っ人を呼ばないと」

<助っ人……？ コ、コレは……！>

メイリンはそう姉に告げると、何らかのデータを送信した。ルナマリアはそれを確認するとその表情を驚きに染めながらモニターを凝視した。

<メイリン、もしかして会長に……>

「うん、こんな事もあるうかと思って連絡しておいたの。当然快諾してくれたわ。最初からこうすれば良かったのよ」

そんなやり取りを交わしつつ2人が見ているモニターには、錚々（そうそう）たるエースパイロット達が名を連ねていた。

第1話「ガンダムってチート機が多いと思う」（後書き）

SDガンダム Generation World を未ブレイの方への解説

ザク？

型式番号：AMX-011

機動戦士ガンダムZZに登場したMS。

ネオ・ジオン軍の汎用試作型MSで、旧ジオン軍のザク？の直系の発展機として開発された高性能MS。機体のカラーは白っぽい灰色。当然そのコンセプトも同じで、武装・バックパック・スカートアーマー等を換装する事であらゆる作戦に対応可能な高い汎用性を有している。また火力・装甲や機動性・運動性の面を見ても全般的に充実している。

しかしこの時代のMSは汎用性よりも火力が重視される傾向にあった為、本機は量産MSの選定競争でかの『サイコ・ガンダム』の簡易量産機『ドーベン・ウルフ』に敗れて試作機数機が実戦投入される程度に留まった。

武装はビームサーベルと銃剣付きのビームライフル。更に内蔵火器として腰部に2門のビーム砲と口部に強力なメガ粒子砲を備えている。

第2話「見てくれや絵で判断して内容に愕然とする事って結構ある」(前書き)

読む上での注意

- 1・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですw
 - 2・と言うか他のキャラも崩壊していますw今回はそれが尚更顕著にwww
 - 3・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですwww
 - 4・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
 - 5・字数少な目です。物足りないかもしれません。
- 以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を
お願いします！

第2話「見てくれや絵で判断して内容に愕然とする事って結構ある」

「これまでの粗筋 チートのフリーダムにフルボッコにされたルナマリアさん。それを見かねたメイリンは会長に連絡を取って援護を取り付けた。さてその援護に来てくれた人物達とは？ モノアイファイト」

「それGガンダムの冒頭ナレーションでしょうがあああ！！！！ネ
夕に詰まったからってパクるなああああッ！！！！！！」

~~~~~

ナスカ級、ルナマリア自室

<やはり、状況は芳しくないか>

机に設置されているモニターに映る金髪の男性がルナマリアからの報告を聞いて呟いた。

「済みません、シヤア会長。折角ザク50とザク？を入手すべく働き掛けて頂いたのに……」

<ルナマリア、君が気にする事は無い。アレが1人で御するには困難な相手である事が掴めただけでも十分な収穫だ。もし納得が行か  
んと言うのなら、今後の作戦でそれを成して見せてくれれば良い>

「は、はい！ ありがとうございます！」

<こちらからは以上だ。直にそちらに着く隊長達と共に頑張ってく  
れ>

「はいっ！……！」

会長である『シャア』アズナブル』の言葉に元気良く返事をする、  
彼からの通信は切れた。

<お姉ちゃん、終わった？>

「うん。今から隊長達と合流するから、艦を今から指示するポイントに向けて」

と、それを見越したかの様にブリッジのメイリンから通信が入った。ルナマリアがそれに対して答えつつ指示を出すと、メイリンは了解と答えてクルーにその情報を伝えた。

<でも隊長さん達が加わるなら心強いわね。ところでお姉ちゃん、1つ気になってたんだけど>

「ん？ 何？」

<何でお姉ちゃんが愛好会の1番隊長をやってるの？ メンバ―みたらお姉ちゃんより凄いキャリアの人は沢山いるのに>

「自分の姉に容赦無いわね……」

容赦無く毒を吐く妹に溜息を吐くと、ルナマリアは頬杖を突きながら説明を始めた。

「まあ簡単に言うと会長とは赤いザク持ちって言う事で前から良くネットで見聞を交わしててね、ある時『では人を集めてこう言った組織を結成しようではないか』って話になったのよ。そこから会長と私が互いに知り合い達に呼び掛けて、今の愛好会が出来たって訳。言ってみれば創設者だからね」

<成程……それでお姉ちゃんが身の丈に合わない地位にいる理由が理解出来たわ>

「よーし分かった表出なさい」

自分の中にある理性と言う名のブレーキが壊れる音を聞きながら、ルナマリアは部屋に何故か置いてあった人間サイズの『ビームトマホーク』を持ってメイリンに告げた。因みに今現在宇宙にいるので表になぞ出られる訳が無いのだが、それを言っていると小嘶そとになってしま  
うので止めておこう。

<あ、隊長さん達が来たみたい>

「チツ……後で覚えてなさいよ」

メイリンからの言葉に舌打ちをすると、ルナマリアはトマホークをその場に放り投げて隊長達を迎えるべく部屋を出た。その際無造作に放り投げられたトマホークは地響きと同時に床に刺さったが、まあ何時もの事なので気にしないでおこう。

~~~~~

15分後

「……で、これは一体どう言う事でせうか？」

カタパルトデッキの中に置かれた3機のMSを見て、ルナマリアは思わず隊長達にそう問い掛けた。

「ココに来る途中、ソレスタルビーイングとコロニー連合のGの戦闘に巻き込まれたのよ……。何とか逃げて来たけどね……」

「うわあ……何てテロ対決……。と言うか皆良く無事でしたね」

「皆の機体は改造に改造を重ねて並のMAより頑丈だから……でも死ぬかと思った」

乗機である『ライブザクウォーリア』の頭と両脚を吹き飛ばされた7番隊隊長　『ミア・キャンベル』が見せた戦闘記録を見て、思い切り引きながらメイリンは漏らした。どうやら記録映像の音声から察するにソレスタルビーイング所属の『セラヴィーガンダム』と『ウイングガンダムゼロ・カスタム』の超高火力砲撃の巻き添えになったらしく、途中でやたらと周囲が眩しくなつて何か吹き飛ば音が響く状態が数秒続いていた。

「ガンダム……叩き潰す理由が増えたよ！　ルナマリア、アンタに全力で協力してやる。絶対にフリーダムを倒すよ！」

「プルツーありがとう！　一緒に頑張りましょう！」

愛機である赤いMS『キュベレイMK-?』を大破寸前まで追い込まれた怨念を小柄な全身からドス黒いオーラとして噴出させながら4番隊隊長である10才程の少女　『プルツー』はルナマリアに告げた。あまりの恨みの深さの為せる業だろうか、邪気にてられて周りの無関係な整備士達がバタバタと倒れていたが当人達にとっては最早どうでも良いらしく完璧にスルーしていた。整備士に幸あれ。

と、メイリンが周囲を見回してふと大事な事に気付いた。

「アレ？　そう言えば今回は9番隊のバーナード・ワイズマン隊長も来るはずでしたよね？　どうしたんですか？」

「いや実は……」

メイリンからの問いに困つた様な表情を見せながら、2番隊隊長を務める黒髪の青年　『ギユネイ・ガス』がその疑問に答えた。

「アイツ、その宙域に転がってたザクの頭に何時も通り気を取られ

第2話「見てくれや絵で判断して内容に愕然とする事って結構ある」（後書き）

SDガンダム Generation World を未ブレイの方への解説

ライブザクウォーリア

型式番号：ZGMF-1000

機動戦士ガンダムSEED DESTINYに登場したMS。

ザフト軍の次世代機『ザクウォーリア』のプロパガンダ仕様機。

『ラクス・クライン』の影武者である『ミア・キャンベル』がザフト軍のティオキア基地への慰問ライブで使用した機体で、ゲーム中では『ザクウォーリア』に彼女を乗せるとこの機体が変わる（つまり彼女の専用機扱い。因みに原作では操縦していたのは一般兵で、彼女はその手の上に乗って踊ったりしていただけなのだ）。

一応最新鋭機であるザクウォーリアがこの様に利用されたのはミアのマネージャである『キングT@KED@』の意向らしい。

余談だがこの機体、最終決戦時に武装を装備して出撃したとされている（公式記録は無いが）。

当然兵器ではなくアート扱いであり、全身ピンクで奇抜な塗装やマキングが施されて武装も基本的に無い。

そこでゲーム中では複数のザクを呼び出して相手を袋叩きにする『

親・衛・隊（威力が高い）』と『ハンドグレネード』で相手を攻撃出来る様になっている。

だがその真価は一定範囲内の味方全機のMPを10%も上昇させる『ラクス・クラインLIVE』であろう。

キュベレイMk-?（プルツィ仕様）

型式番号：AMX-004-3

機動戦士ガンダムZZに登場したMS。

ネオ・ジオン軍のニュータイプ専用試作型MSで、ネオ・ジオン軍の強化人間『プルツィ』の専用機。

ネオ・ジオン軍の指導者『ハマーン・カーン』の乗機『キュベレイ』の通産3号に当たる機体で、真紅のボディが特徴。

基本的な性能は他2機とあまり変わらないが、本機には鹵獲した『サイコガンダムMk-?』（プルツィはこちらに搭乗した事もある）の技術を応用した『サイコ・コントロール・システム』が搭載されていると言う違いがある。これは専用のヘッドセットを介する事に因ってピックアップしたパイロットの感応波を機体の操作に適用すると言うシステムで、条件次第では外部から機体を遠隔制御する事すら可能になっている。

武装はビームサーベルと兼用のハンドランチャー、そしてオールレンジ攻撃兵器『ファンネル』。

第3話「外に出た開放感って半端無い」(前書き)

読む上での注意

- 1 ・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですW
- 2 ・と言うか他のキャラも崩壊していますWWW
- 3 ・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですWWW
- 4 ・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
- 5 ・字数少な目です。物足りないかもしれません。

以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を
お願いします！

第3話「外に出た開放感って半端無い」

「これまでの粗筋　チートの塊フリーダムを撃退すべくルナマリアさんの下に颯爽　登場した全世界モノアイ同好会が誇る精鋭達。その活躍に因ってフリーダムは遂に倒れたが、その時更なる敵が

「現実逃避してる場合かあああッ！！！！」

~~~~~

「な、何とか逃げ切った……」

リーダーから自分達を執拗に追撃していたダブルオークアンタの反応が消えたのを確認して、メイリンはホッと一息吐いた。

「よ、良かった……。あの化け物Gの攻撃なんか受けたらナスカ級じゃ一撃で轟沈してたからね……」

ハアハアと荒い息を吐きながら、ルナマリアもそれに同意した。胸に手を当てて深呼吸しているその姿からは、未だに恐怖が拭えていないのが見て取れた。

と。

「おい、そっちが落ち着いたらコツチをどうにかしてくれ」

「へ？」

不意に自分達と同じくブリッジにいたギュネイから声を掛けられて、

2人は同時にそちらを見た。

「ああっ！ ミーア！」

「一体どうしたんですか！？ 凄い鼻血が！」

「お前らがアイツの攻撃をかわす為に90度艦を横倒しにするとかバレルロールするとか無茶苦茶をやったせいだろ……。急いで医務室に……」

視界に広がる自分の仲間の大惨事（簡単に言うと壁に顔面から激突してその結果周囲が鼻血で血塗れになっている）を見て、ルナマリアとメイリンは再び慌て始めた。

そして。

「血が着いたら取れないじゃない！」

「……そっちの心配じゃないだろがああッ……！！！！」

ルナマリア  
馬鹿の気持ちの良い位盛大なスルーに一齐に突っ込んだ。同時に凄  
い音がブリッジに響いて『何か』が床に減り込んだが、取り敢えず  
スルーするでしょう。

「あ、天使が見える……天使ってメイド服着てるんだ……」

「心が消えて！？ 目を覚ませミーア！」

「オイしっかりしろ！ 死ぬなアアッ……！！」

「医務室ウウツ……！！ 急いで下さい一刻も早く……！！」

ブリッジの混乱発生から数秒後に駆けつけた医務官達は後にこう語  
っている。

『カオス  
混沌の極み』だと。

~~~~~  
~~~~~

数分後、ナスカ級艦内会議室

「と、言う訳で」

「何が』と、言う訳で』なんだ」

頭に大きな絆創膏を貼った状態で会議を始めようとしたルナマリアにブルツォが突っ込んだ。

「それより今はミーアの仇討ちの為にもフリーダムを倒す為に作戦を立てないと」

「勝手に亡き者にするなよ！ 何だ、アイツの事が嫌いなのか!？」

「それでこれがフリーダムのデータなんだけど」

「スルーしたよこの人。未だに親衛隊のメンバーをミーアさんに盗られた事を根に持ってるよ」

「ドコのアイドルの抗争ごなはいつじだよ!」「」

ギユネイのツツコミをスルーしながら、ルナマリアは一人で話を進行して行く。……何だかメイリンの暴露した黒い裏話が混ざっているが、コレ以上聞くと精神衛生上宜しくない事になりそうなのでスルーするとしてよう。

「……まあ良い。それよりコレがヤツのデータなら、やはり手強いな……」

ツツコミから話を本題に戻して、ギユネイが意見を述べた。手元にある資料には徹底的に調べ上げられたフリーダムガンダムのデータ

がビツシリと描かれており、彼の言う通りにそれは驚異的と言つ言葉が相応しいモノになっていた。

「距離を取ればバラエーナ砲にクスイファイアス……射撃戦は不利、か……。かと言って詰め寄っても機動性ではアイツの方が上か……」

難しいな、とプルツィは顔を顰めた。

「取り敢えず一斉射撃の前後には少しブランクがあるから、その隙を突くのが基本だと思っただけど」

「だがそれだと2人以上を囿にしなくちゃならんだろう。データを  
見る限り単体の相手に無駄撃ちはしていないからな」

「なら3人で三方から仕掛けるって言うのはどう？」

「内訳は1人が完全に回避に専念して、もう2人がフリーダムを攻撃か？フリーダムが急に攻撃対象を変えた場合には役割を変えなきゃいけないから難しいし、そんなに上手く連携を取れるのか？」

「うーん……確かに急に配置を変えられたらそれにも対応しなきゃいけないし難しいわね」

「艦の援護で弾幕を張るのはどうだ？」

手元の書類と目の前のモニターを見ながら、3人は作戦について話を続ける。だが敵の弱点を突いた効果的な戦術が中々見つからず、次第に3人の顔に困惑の色が見えだした。

と、その時。

「えっと、お姉ちゃん。私、フリーダムの弱点見付けちゃったかも

……」  
「……え？」

メイリンの思わぬ言葉が、会議室に響いた。

~~~~~

一方その頃、アリオスガンダムに跳ね飛ばされたバーナド・ワイズマン（バーニィ）はと言うと

「グランザムでも一撃とは……やはりモノアイ同好会の隊長は流石だな」

「いや、さっきのはキツかったよ。まさかこんなMAを用意してたとは思わなかったしさ。それで問題点だけど

「……成程、すぐに改良に取り掛かるう」

流された先で同盟先のジオン独立火星軍（通称オールズモビル）に助けられ、訓練と機体の調整の意味合いを兼ねて兵士と練習試合をしていた。因みにバーニィの50連勝である。

……バーニィよ、お前本当に何をしてるんだ。

第3話「外に出た開放感って半端無い」（後書き）

SDガンダム Generation World を未ブレイの方への解説

ダブルオークアンタ

型式番号：GNT-0000

劇場版機動戦士ガンダムOO Awakening of the Trailblazer に登場したMS。

新生ソレスタルビーイングの汎用MSで、同組織所属のガンダムマスター「刹那」F「セイエイ」の専用機として開発された機体。機体カラーは白と青。

2年前の大戦で刹那が搭乗していた「ダブルオーライザー」の後継機で、背面と左肩のバインダーにそれぞれ1基の「GNDライヴ（太陽炉）」を搭載した「ツインドライヴシステム」搭載機でもある。この機体のGNDライヴは当初からツインドライヴでの使用を前提に木星で新規製造された物であり、「ダブルオーガンダム」に比べての「オーライザー」の様な外部装置に因るシステム調整無しに完全同調した状態の安定稼動が可能。

更に本機はソレスタルビーイングの中核を担う量子演算システム「ヴェーダ」の小型ターミナルも搭載しており、これに因って操縦時は常時ヴェーダと一体化したイノベイド・「ティエリア」アーデ」のサポートを受ける事が出来る。

当然武装面も充実しており、刹那が搭乗して来た『ガンダムエクシア』と『ダブルオーライザー』に装備されて来た『GNソード』シリーズの最新型である『GNソードV』に加えて攻守両面で性能を発揮する6基の『GNソードビット』を搭載する事で全距離に対応可能。加えてGNソードVとGNソードビットを合体させる事でより破壊力を高めたバスターソード及びバスターライフル状態として運用出来る為、その戦闘能力は驚異的。

だがこの機体の本質は戦闘ではなく『対話』にある。2基のGNドライブを直結させる事で発動させる『QUANTAM・BURST』に因って高濃度粒子領域内で脳量子波に因る意識共有を行って戦闘空間内の人々の想いを繋げ、戦いを止めると言うこの特性こそがそれを体現している。

地球外変異生命体『ELS』^{エルス}との最終決戦の最中に完成した本機は刹那の乗機として多数のELSを退けた後に大型ELSの内部でQUANTAM・BURSTを発動して直接対話を行った。

余談ではあるが本機の頭部のデザインは開発者の『イアン・ヴァステイ』の意向でかつての刹那の愛機であった『ガンダムエクシア』と似た形状になっている。

フリーダムガンダム

型式番号：ZGMF-X10A

機動戦士ガンダムSEEDに登場したMS。

ザフト軍の汎用MSで、ヘリオポリスで連合軍から奪取した『G』の基本データと運用データを基にザフトの各MS開発局が合同で開

発した機体。白いボディで背部に蒼色の羽根の様なパーツを備えている。このウィングは射撃兵器の使用に伴う機体の高温化を抑える放熱板としての能力と空中での姿勢制御の役割を担っている。

『ニュートロンジヤマーキャンセラー』と言う装備を搭載しており、ザフト軍が幾つも放った核運動阻害装備である『ニュートロンジヤマー』の影響を受けずに核エンジンで駆動する事を可能にしている。それ故にエネルギー切れの心配が無く、一定のエネルギーと引き換えに物理的なダメージを無効化する『フェイズソフト装甲』を常時展開可能としている為に実体弾に対する防御力は非常に高い（地球軍開発の5機のみにはエネルギーの都合上被弾限界があったが、フリーダムにはそれが無い）。

多数の敵を相手にして戦う事を前提に設計されており、背部ウィングに格納されたプラズマカノン『バリエーナ・プラズマ収束ビーム砲』・両腰部に装備された『クスイフィアス・レール砲』と言った多数の射撃兵器と複数の攻撃目標を同時にロックする『マルチロックオンシステム』を持ち複数の機体を一瞬で殲滅させる圧倒的な殲滅力を有している（当然だがビームサーベルとビームライフルも備えている）。

更に背部ウィングを展開する事で移行する『ハイマツトモード』になる事で宇宙空間と大気圏内の双方で高い機動性能を発揮可能。

プラントで完成した直後に『ラクス・クライン』の手引きで『キラ・ヤマト』へと譲渡され、以降彼の乗機となる。

機体性能もさる事ながらキラの圧倒的なパイロット能力に因って凄まじい戦闘能力を誇り、2年経ったSEED DESTINYの世界でも最新鋭機を圧倒していた。

最後はザフト軍の『エンジェルダウン作戦』中に戦闘スタイルの隙を突く巧みな攻撃を行う『シン・アスカ』の『インパルスガンダム』に翻弄され、完全に破壊される。

ミーティア

『フリーダムガンダム』と『ジャスティスガンダム』、及びその後継機である『ストライクフリーダムガンダム』と『インフィニットジャスティスガンダム』の4機を含む『ZGMF-Xシリーズ』用開発された大型武装モジュール。連結したMSに搭載された核エンジンの余剰エネルギーに因って稼動しており、コストパフォーマンスに秀でた強化武装と言える。

『高エネルギー収束火線砲』や『エリナケウス艦対艦ミサイル』などの多数の重火器を搭載しており、ドッキングしたMSは反則級の火力を誇る。

またドッキング構造もシンプルで、着脱も容易。その一方で大型故の取り回しの悪さは健在で、SEEDの『ヤキン・ドゥーエ』での最終決戦においてはザフト軍の指揮官『ラウ・ル・クルーゼ』の駆る『プロヴィデンスガンダム』に翻弄されてフリーダムガンダムは自身のミーティアを破壊されている。

尚通常時は収納形態としてZGMF-Xシリーズの専用運用艦『エターナル』の艦首にドッキングして艦砲として使われている。

ザク？改

型式番号MS-06FZ

機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争に登場したMS。

ジオン公国軍の汎用量産型MSで、『MS総合整備計画』に因って開発された後期生産型MSの1つ。型式番号からも分かる通り『ザク?F型』の改修型で、全ての性能 特に機動力はアポジモーターの増設とスラスターの大型化に因って飛躍的に向上している。

反面推力は向上したが推進剤の搭載量自体は変わっておらず、最大推力での行動時間は半分にまで低下している。

武装面も『ハンドグレネード』の追加や新型マシンガン(グレネードランチャー装備)に変更になっている為にその火力は高い。

尤も、上記の評価はベースとなつている量産機のザク?と比較してであり当時使われていた他機と比べても見劣りする面があるのは確かである。

グランザム

型式番号：OMAX-01

機動戦士ガンダムF91 フォーミュラー戦記0122に登場したMA。

火星独立ジオン軍の試作型MAで、旧ジオン軍の重MA『ビッグザム』を陸戦用に再設計した機体。

火星独立ジオン軍の地球侵攻作戦の切り札として開発された機体で、ホバー走行に因って巨体の割に高い機動性を有している。

また大型メガ粒子砲や拡散メガ粒子砲の装備に因って火力も高く、
ビグザムと比較してもその火力に遜色は無い。

しかし開発は難航し、完成前に火星独立ジオン軍は壊滅した為に本
機が日の目を見る事は無かった。

第4話「ブツ飛び過ぎてると基本誰も突っ込まなくなる」(前書き)

読む上での注意

- 1 ・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですW
- 2 ・と言うか他のキャラも崩壊していますWWW
- 3 ・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですWWW
- 4 ・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
- 5 ・字数少な目です。物足りないかもしれません。
- 6 ・作者のネタが早くも枯渇して来たので駄文です。

以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を
お願いします！

第4話「ブツ飛び過ぎてると基本誰も突っ込まなくなる」

「これまでの粗筋　クアンタをナスカ級で撒いた後の作戦会議で、メイリンが名案を提案しました。メイリンは凄いなあ。私にはとても出来ない」

「ドコの読書感想文！？　無理矢理言わされてる感しか無いんですけどー！」

~~~~~

作戦会議から少し経って

「まさか重力下で戦う事になるとはな……」

地球に降下してから乗り込んだ戦艦のカタパルト内で、ギユネイ  
「ガスはそんな言葉を呟いた。」

「まあフリーダムをブツ潰せるんなら別に良いけどね。にしても盲点だったよ、こんな効果的な作戦があったとはさ」

「良く考えてみれば気付く事だったがな。アイツの兵装の殆どの威力を低下させて、こっちの得意フィールドに引き摺り込む。戦術の基本と言うヤツだ」

ブルツの言葉にそう返すと、ギユネイは正面に目をやった。  
そこにあつたのは、1機の巨大なMSと3機のMSだった。

巨大な方はペールグリーンのカラーリングで、卵を中程から真っ二つに切った様なずんぐりとした前後対称の体型をしている。その左右には3つのクローを三角の配置に取り付けたアームを2つ、脚

部にはその体型にマッチした形状の脚を備えている。更に両肩には合わせて4門ずつ計8門の砲塔を備えていた。

もう一方は焦茶とクリーム色で配色されたボディを持ち、頭がやや大きめかつ丸みを帯びていた。その両腕には6つの鋭利なクローが装着されており、ドコが愛嬌を感じさせる外見に反する凶悪な印象を与えていた。

「見せてやるうぜ。モノアイ愛好会が誇る機体とパイロットの恐ろしさってヤツをな」

「そうだね。……ってホーク姉妹はドコに行ったのさ？ もう出撃直前だよ」

「メイリンなら今『ゾック』のコクピットで最終チェックをしてるぞ。それで、ルナマリアならあそこに」

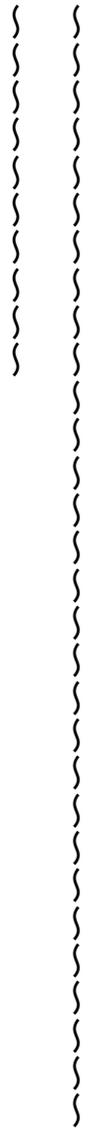
ギユネイの言葉に同意しつつ、プルツィは周囲を見渡してその場にはいないリーダーの姿を探した。それに対してギユネイが指差した先には、

「フフフ……アナタに乗るのも久し振りね、『トーマ』。思い出すなあ……第13回アツガイファイトの決勝戦。あの時は無茶な操縦でボロボロにしちゃってゴメンね」

自分の乗るMS『アツガイ』を丁寧に磨きながら独り言で何かを語っている国宝級馬鹿の姿があった。

「……アイツ、まだ自分の機体に観てるアニメキャラの名前付ける癖が治ってなかったのか」

「アレが無きゃアイツも凄いな……昨年のアツガイファイトじゃ優勝してるしな」



## ギユネイの回想

「さあ、いよいよ第13回アツガイファイトも最後の戦いを残すのみです！ 勝利の栄冠と純金のアツガイをその手に掴むのは一体どちらになるのか！？ それでは、選手入場です！」

リングの中央に立つ実況のハイテンションな口上に合わせて、超満員の会場のボルテージが上がる。

「赤コーナー！ コロニー格闘技覇者・『キング・オブ・ハート』  
……ドモオオオン、カアアアッシュュ！！！」

周囲の空気を振るわせる程の轟きと共に入って来たのは、赤い鉢巻とマントを身に着けた青年。その体付きと纏う雰囲気は、彼が常人などでは決して歯が立たない程の実力を備えた戦士である事を肩書きと共に殊更に主張していた。

「青コーナー！ 全世界モノアイ愛好会1番隊隊長兼ザフト軍パイロット……ルナマリア、ホオオオクツ！！！」

そんな彼に相対する様な向きに、ルナマリアは腕を組みながら悠々と会場に姿を見せた。何だか全身から某野菜人もビックリな程のオーラが出ている様な気がするが気のせいだろう、と言うか気のせいであれ。

「フン……少しは出来る様だな」

「それはこっちの台詞よ。G乗りにしてはやるみたいじゃない」

お互いに火花を散らせながら言葉を交わすと、2人は距離を取った。

そして

「出るおおおおッ!!! アッガアアアアイ!!!」

咆哮と共に高らかに掲げた右手の指を弾いた。それに合わせて空からそれぞれの乗るアツガイが背後に着地し、2人はそのままそれぞれに飛び乗った。

「それでは……アツガイファイト、レディイイ……ゴオオオッ!!!」

~~~~~

「待て、おかしい。色々とおかしい。と言っか何やってんだアイツは!」

「あの決勝戦は壮絶だったぜ。互いに片腕を吹き飛ばされながらもスーパーモードを起動してのビームカノンの撃ち合い。最後はタッチの差でルナマリアがドモン=カッシュのアツガイを倒して『キング・オブ・アツガイ』の称号を継承して……」

「謝れ!!! この作品を見ているGガンファン全員に謝れ!!!
と言っかドモンの称号が何時の間にか変わってるじゃないか!!!」

盛り上がった戦いを思い出して感慨に浸るギユネイに対し、息が切れる程の激しいツッコミをするプルツ。「アレ? アタシって本来こんな役回りだったか?」と言っか考えが彼女の脳裏を過ぎっ

だが、そもそも元の自分の役回りが分からなくなっている事に気付いて思考を止めた。

「……ま、良いか。そろそろ時間だ、ルナマリアにも伝えるよ」
「ん？ ああ、そうだな」

そして、彼らはいよいよ宿敵フリーダムとの戦闘に望む

第4話「ブツ飛び過ぎると基本誰も突っ込まなくなる」(後書き)

SDガンダム Generation World を未ブレイの方への解説

ゾック

型式番号：MSM 10

機動戦士ガンダムに登場したMS。

ジオン公国軍の水陸両用試作MSで、前後対称と言う極めて珍しい構造(理由は後述)の機体。

攻撃力に主眼を置いて開発された機体であり、実質的にはMSとMAの中間に分類される機体である。

公国軍のMSの中でもトップクラスの装甲の分厚さを誇り、加えて前後に4門・頭部に1門備えられたメガ粒子砲に因って火力も非常に高い。

反面総重量が200トンを軽く超えているせいで陸上での移動はホバー走行に因って行っている。それ故に脚部は稼動せず、腕部も殆どバランサーとして扱われている。前述の特異な形状はその機動性の劣悪さを補う為の物である。

総じて評するに機動兵器とは言い難い機体で、本機の事を『局地戦用移動メガ粒子砲座』と呼ぶ者もいた程。

武装は前述の通り、頭部に1門と両肩に合わせて4門ずつ計8門備えられたメガ粒子砲。

アツガイ

型式番号：M S M 0 4

機動戦士ガンダムに登場したMS。

ジオン公国軍の水陸両用量産MSで、ジェネレーターを始めとしてザクのパーツを大幅に流用している低コスト機。

当然水陸両用機としては装甲も薄く火力も低い為、当初は訓練機として開発されていた。

しかし機体の廃熱量が少なくステルス性に優れていた為に改良を加えて軽武装偵察機としての役割を与えられた経緯を持つ。

武装はロケット砲の砲門と自在に変更の利くアイアン・ネイルと右腕部中央のビームカノン、そして頭部の105mmバルカン砲。

アツガイファイトとは

ことぶきつかさ氏の漫画『いけ！いけ！ぼくらのVガンダム！』で登場したネタ。『機動武闘伝 Gガンダム』の『ガンダムファイト』のパロディであり、ガンダムファイトよりも格下とされている。

作中ではスーパーモードの制御が出来ない事を理由にシユバルツに因って降格されたドモンが参戦（搭乗したのは『シャイニングアツガイ』と言うシャイニングガンダム風のアツガイ。シャイニングフ

インガーを放てる上にスーパーモードにもなれた。尚、スーパーモード時には頭部が展開する)、同じく降格されていた『チボデー』クロケット』との試合を行っている。

第5話「アニメグッズの購買は計画的に」(前書き)

読む上での注意

- 1・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですw
- 2・と言うか他のキャラも崩壊していますwww今回はあの黒い歌姫が特にwww
- 3・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですwww
- 4・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
- 5・字数少な目です。物足りないかもしれません。
- 6・作者のネタが枯渇して来たので駄文です。

以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を
お願いします！

第5話「アニメグッズの購買は計画的に」

「これまでの粗筋　フリーダムを葬るべく始動したモノアイ同好会のエリート達。アツガイファイトのチャンピオンたるルナマリアさんとその他大勢はフリーダムを相手にどう戦うのか！　はいこれで良いでしょ！」

「八つ当たってる！　今回出番が無かったからってこんなトコで八つ当たってる！」

~~~~~

アホカルテットが出陣する少し前、離れた場所にある戦艦アークエンジェル

「はあ……」

戦艦アークエンジェルのカタパルトで、『キラハヤマト』は一際盛大な溜息を吐いた。

「好い加減諦めてくれないかな、あの子。御蔭で全然休めないよ……」

自身の愛機を見上げながら彼が言及したのは無論ルナマリア。彼女に言われの無い（ルナマリアにとってはマリアナ海溝より深い）因縁を付けられてしょっちゅう戦闘を吹っ掛けられているせいで遊ぶどころか無駄に疲労が溜まり、寝不足になっていたのだ。

これを聞くと、『ならわざわざ相手をせずスルーすれば良いではないか』と言う人達もいる事と思う。勿論それが最も賢明な判断で

ある事は疑いようの無い事実である。

だがしかし、キラがその選択肢をチョイスする事は出来ない。もしその選択肢を選ぼうものなら速攻で『全世界ガンダム親衛隊』の規約第一条に違反する事となり「お前はガンダムではない！ お前の存在を……この俺が駆逐する！」とか言うガンダム大好きイノベイターや「任務了解。戦闘放棄したガンダムを破壊する」とか言う無口な自爆マニア・果ては「戦わずして負けを認めるとは、このK O S H I N U K E めがアアアツ！！」とか言うて即死モノのパンチや蹴りを放つ不敗な師匠達が制裁を加えに来るのだ（しかも全力で）。いかにキラが能力に秀でたパイロットであるとは言え、こんな連中で全力で仕掛けられたら勝ち目が無い（と言うか命の灯が一瞬で掻き消されてしまう）。そんな訳で、彼は結果の決まり切った勝負に赴いて無駄に疲労せねばならないのである。

「ラクスがアニメに嵌まってグッズやDVDをあんなに買い漁らなかつたら、彼らの支援を受ける為に入る必要が無かつたのに……。幾ら何でも40作品分もそんな事したら、僕達の資金だって無くなるよ……」

「整備の方終わりました！ 何時でも発進出来ますよ」

「ありがとう。じゃあ出来るだけ早く片付けて来るよ」

壁に寄り掛かって1人愚痴を零していると、若い整備士がフリーダム of the 整備が終わった事を告げに歩いて来た。彼に軽く礼を言うと、キラはフリーダムに向かって行った。

と。

「あ、済みません。今月は特に苦しくてラクス様がレールガンを買入れたので、気をつけて下さいね」

「……は？」

自分に対して整備士Aが投げ掛けた言葉に、キラは思わず硬直した。

「ち……ちょっと待って。今何かオカシイ言葉が鼓膜を揺さぶったんだけど。も、もう1回言ってくれろ？」

「は、はい……。実はラクス様が『そう言えば今月はアレも新作が出版されましたわね』とか仰って皆が止めるのも聞かずに保存用と布教用と読書用と×××(ピー)用にライトノベル全10種類を大量に購入なさって……」

「ラクスウウウウウツ！！！！ 何をしてるんだ君はアアアアアツ！！！！！」

あんまりなラクスの傍若無人振りに、キラは思わずSEEDを発動させて絶叫突っ込みを入れた。

「現状分かって無さ過ぎるだろ！ 今僕達は三食砂糖水のカブト虫状態なのに何で更に浪費するの！？ 何考えてるのあの歌姫は！」

「流石に宇宙にいるアランさんやバルトフェルドさん達も止めようとMSを持ちだしたらしいんですが、ラクス様のインフィニットジャステイスに一撃でOHANA SHIされて……」

「……………」

脳裏にハッキリと映像化されて浮かんだ光景に激しい頭痛と胃痛を感じ、キラは思わず頭と腹を手で押さえてその場に屈んだ。整備士の青年もどう声を掛けて良いか分からず、その場に暫くの間異様に気まずい空気が流れた。

「止めなきゃ……………」

「は？」

「早く戦いを止めなきゃ！ でないと僕達が死ぬ！ 急いでこの終わり無き争いの連鎖を断ち切って、ラクスを止めるんだ！」

「え？ ちょっ、キラさん!？」

凄まじい早口で何やら決意を固めると共に、キラは物凄いスピードでフリーダムに乗り込んで発進した。

「キラさん、頼みます……！ 僕達を救って下さい……！」

残された整備士はそう強く願うと、再び仕事に戻った。

~~~~~

一方その頃、この一連のドタバタの元凶は

「ああ……マミさんが……杏子さんにさやかさんまで……」

1人エターナルの自室で、大量購入したアニメのブルーレイを1つ1つ閲覧していた。

……彼女に天誅が下される日は何時になるのだろうか？ それは誰にも分からない。

こうして互いに負けられない理由を背負って、キラとルナマリア達は戦場で相対する事となる。

第6話「主人公機には後継機があるのがお約束だけど、そんなの造る余裕がある

読む上での注意

- 1 ・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですW
- 2 ・と言うか他のキャラも崩壊していますWWW
- 3 ・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですWWW
- 4 ・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
- 5 ・字数少な目です。物足りないかもしれません。
- 6 ・作者のネタが枯渇して来たので駄文です。
- 7 ・今回は戦闘なのでギャグは少なめです。

以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を
お願いします！

第6話「主人公機には後継機があるのがお約束だけど、そんなの造る余裕がある

「これまでの粗筋　フリーダムを葬るべく戦場に向かったルナ
マリアさんと愉快な仲間達。その頃フリーダムのパイロットの『キ
ラ』ヤマト』は金欠と言う強敵を打ち倒すべく新たに闘志を燃やし
ていたのです。ってルナはルナは新たなキャラを模索しつつ需要
の全く無い粗筋を真面目に言ってみたりー」
「ドコが真面目？　て言うか気持ち悪いから今すぐ止めてね」

~~~~~

戦場として決定した海域

<そろそろ来るな>

海底の土に機体の脚を着けた状態で、ギユネイ「ガスは気を引き  
締めつつそんな事を呟いた。彼の視界にはモニターを介して蒼い海  
が広がっており、思わず飛び込みたくなる様な鮮やかさを備えてい  
た。

<ああ。けどルナマリアのヤツ、良いセンスをしてるね。この海に  
フリーダムを沈めるなんて、想像するだけで気分が良くなるよ>

彼の言葉に対し、近くに佇んでいたプルツーがモニター越しに同  
意した。その言葉はドコか嬉しそうで、表情が攻撃的な笑みに歪ん  
でいるだろうと言う事は容易に想像出来た。

<機影確認、フリーダムです！>

<来たか……>  
<……来い！>

真剣な口調のメイリンから来た通信を聞き、ギユネイとプルツィは気を引き締めた。如何に有利な環境を選んだとは言え、相手は圧倒的な力を誇るフリーダムなのだ。ましてフィールドは水中。もし撃墜されれば、『不殺』を信条としているフリーダムが相手でも命を落としかねないだろう。だからこそ、彼らは何時も以上の集中力と緊張を以って身構えた。

だが、複数人集まると例外は出るものである。

「待ってたわよフリーダム！ 『クロノ』と『マミ』と『イチカ』の仇と、スパロボの恨みイイイイッ！！！」

約一名の馬鹿れいがいがそんな緊迫した空気をブツ壊す台詞と共にブースターを吹かして水中から勢い良く飛び出し、そしてそのまま空中のフリーダムへと右腕のクローを突き出したのだ。不意を突かれたキラは回避が間に合わない判断を下すかさずシールドで受け止めたが、強固なハズのシールドは爪が食い込むに連れて嫌な音と亀裂を生み出し始めた。

<クッ……！>

「どう？ レベル99まで強化した『トーマ』のアイアン・ネイルは？ 今日こそ叩き落としてやるわ、フリーダム！」

<そうは……行かない！ 僕だって、負ける訳には！>

言葉と共にフリーダムが盾を持つ左腕を後ろへと引く勢いで機体の軸を変え、強烈な蹴りを放とうとした瞬間。

<させるか!>

<そらよッ!!!>

<しまッ!? うわあッ!>

不意に左右を挟む様に2機のアツガイが飛び出し、フリーダムへとビーム砲を放った。完全に攻撃態勢に入っていたフリーダムは挟み撃ちのそれを避け切れず、爆音と共に機体を大きく揺らした。その隙にルナマリアの物を含む3機は水中へと飛び込み、機体の体勢を海底で立て直した。

「ゴ、ゴメン……。アイツを見てたらつい……」

<気にすんな。ヤツにダメージを与えられたんだから結果オーライだ>

<ギユネイの言う通りだね。それよりこのままアイツを一気に仕留めるよ>

「う、うん……」

2人の言葉に頷きつつ、ルナマリアは彼らと隊列を組み直した。

そして。

<ええいッ!!!>

掛け声と共に、メイリンのゾックがフリーダムに向けて火を吹く。続け様に放たれるそれはフリーダムの退路を断ち、次第に機体を削りダメージを与えて行く。

<クッ!!!>

危機感を覚えたのだろう、フリーダムが猛攻を掻い潜りながら水

中へと飛び込む。そして飛び込むと同時に海底で構えていたゾックへと一気に迫り、強力な蹴りで思い切り巨体を倒した。バランスを失ったゾックはその巨体を維持出来ずに転倒し、海中に大量の泥を巻き上げた。濃黒色の泥土はあつと言う間に周囲を包み込み、鮮やかな蒼を一瞬で塗り潰した。

<しまった！ 視界が！>

<くうツ……！ 今だよお姉ちゃん！ 皆さん！>

「せえええええツ！！！」

<うおおおおツ！！！！>

<はああああツ！！！！>

刹那、三方向から3機のアツガイが泥を吹き飛ばしつつフリーダムへと突撃を仕掛けた。

<ままだ！>

<何ツ！？ どわあツ！>

モニターの映像で迫り来る機体を睨みながら、キラは機体を操作する。体軸を捻りながら放たれた鋭い蹴りは1番接近していたギユネイのアツガイを強かに打ち据え、装甲を砕きながら吹き飛ばした。

<はあああツ！！！！>

<クソツ！ コイツ……！ うあツ！>

そのままの体勢からスラスターを噴かせてプルツの駆る2機目に襲い掛かる。当然プルツはそれをかわすべく距離を取ろうとしたが、フリーダムは圧倒的な機動力を武器に見ると距離を詰めて装甲が凹む勢いで殴り飛ばした。

その瞬間。

「貰ったアツ!!!」

<ツ!?!? うああああアツ!!!>

『背後から受けた強烈な一撃に因って海中を100mは吹き飛ばされた』。

「忘れたの? 私の『トーマ』はレベル99! パワーだけじゃなくて機動性だってアンタに引けを取らないのよ!」

<クツ……! 今の一撃で機体が……!>

「コレで終わりよ、フリーダム!」

得意気な止め宣告と共に、凄まじい速度でルナマリアのアツガイが迫る。

<クツ……! まだだツ……!>

「……まだそんな力が……でもツ!」

しかし間一髪の所でフリーダムが空中に急上昇した事で空振りに終わる。後一步で止めを刺し損ねた事に顔を顰めると、体勢を立て直してそのまま追撃した。

<クツ……流石にマズイ……!>

追撃を確認したキラがそんな事を言った瞬間。不意にモニターを通して通信が繋がった。そしてそれに合わせて、フリーダムに似たMSがゆっくりと降下して来た。

<キラ!>

<!? アスラン!?!>

<話は後だ! 今改造レベル99の『ストライクフリーダム』を送ったから乗り換える!>

<え!?! わ、分かった!>

友人からの言葉に返事を返すと同時にキラはすかさず脱出装置を作動させてフリーダムから退避し、ストライクフリーダムに乗り換えた。

「ウ、ウソオオオオ!! そんなの反則でしょ!!!」

<コレでツ!!!>

「ちょ……待つ! ま、まだ心の準」

ルナマリアが最後まで言い切る前に、彼女のアツガイを無数のビーム光が飲み込んだ。

「ふ、不幸だアアアアツ!!!」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「うう……。トーマが……私のトーマが……」

「おいうるせえぞ! 静かにしろ!」

「済みません済みません! ウチの愚姉が済みません!」

その後、全治2週間ながら夜な夜な魔される某赤服がドコぞの病院で目撃されたとかされなかったとか……。

第6話「主人公機には後継機があるのがお約束だけど、そんなの造る余裕がある

SDガンダム Generation World を未ブ
レイの方への解説

ストライクフリーダム

型式番号：ZGMF X20A

機動戦士ガンダムSEED DESTINYに登場したMS。

ザフトの統合開発局に因って『フリーダムガンダム』の直接の後継機として設計されていた基本データをラクスクライン率いるクライン派が盗用し、更なる改良を加える事で完成させた機体。後継機である為かその外見は『フリーダムガンダム』に酷似しているが、『DESTINYガンダム』と同様に『核エンジン』と『デュートリアンエンジン』の2つを組み合わせた『ハイパーデュートリアンエンジン』を主機関にしている為に出力はフリーダムガンダムの数倍と圧倒的。

フリーダムガンダムと同様中・遠距離での戦闘を主眼に置いた武装を多数備えており、ザフト軍の最新鋭機である『DESTINYガンダム』や『レジェンドガンダム』に比肩する程の高い火力を誇る。

作中ではキラの能力と相俟って初陣で25機のMSを2分で全機戦闘不能にすると言う華々しいデビューを皮切りに、最終決戦まで無傷でい続ける快挙を成し遂げた。

『C・E最強のMS』の称号を得た機体であり、死角は粗無いと言

って良い。あるとすればその超性能故にキラ以外には操縦が困難であると言う事と、圧倒的な機動性を得るために防御力が極端に低くなっていると言う事だろう。

インフィニットジャスティスガンダム

型式番号：ZGMF X19A

機動戦士ガンダムSEED DESTINYに登場したMS。

ザフトの統合開発局に因って設計されていた基本データをラクスII クライン率いるクライン派が盗用し、更なる改良を加える事で完成させた機体。後継機である為か赤いカラーリングで背部に専用のフライトユニットファトゥム 01（ゼロワン）を装備しているなど『ジャスティスガンダム』と良く似た外見なのが特徴。

最終調整の段階でキラII ヤマトからの強い提言があった為に当時の彼の愛機であった『ストライクフリーダムガンダム』との連携運用を前提にして完成している。

搭乗者であるアスランII ザラに合わせて近・中距離での戦闘を主眼に置いた武装を多数備えており、ザフト軍の最新鋭機である『デステイニーガンダム』や『レジェンドガンダム』に比肩する程の高い火力を誇る。またデステイニーガンダムと同様に『核エンジン』と『デュートリオンエンジン』の2つを組み合わせた『ハイパーデュートリオンエンジン』を主機関にしている為に出力も圧倒的。

作中ではアスランの能力と相俟ってシンII アスカのデステイニーガンダムを簡単に大破させるなど驚異的な戦果を挙げている。

余談であるがラクスマークラインが搭乗していた事もある（と言っても戦闘をした訳ではなく艦内に本機を搬入する為だが）。

第7話「相談すると皆意外と乗ってくれる」(前書き)

読む上での注意

- 1 ・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですw
 - 2 ・と言うか他のキャラも崩壊していますwww
 - 3 ・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですwww
 - 4 ・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
 - 5 ・字数少な目です。物足りないかもしれません。
 - 6 ・作者のネタが枯渇して来たので駄文です。
 - 7 ・作者がスパロボをプレイ中の為、影響されて若干スパロボネタが入っています。
 - 8 ・今回は特殊な書き方故に描写が少ないです。
 - 9 ・作中に出て来るアドレスは架空です。実在の物と一切関係ありません。まあこんなアドレス存在しませんがwww
- 以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を
お願いします！

第7話「相談すると皆意外と乗ってくれる」

「これまでの粗筋 東京西部から神奈川・埼玉・山梨に跨る学園都市。その中に存在し、武器を持つロボットパイロット 通称『武パイ』が集まる東京武パイ高校。そこに在籍しているSランク武パイのルナマリアさん。そんな彼女の下にある時言葉を話す不思議なマスコット『キュウベレイ』が現れて

「粗筋が1ミクロも粗筋になってないんだけど！ て言うか最近のアニメの内容ごちゃ混ぜだったからって人気が出る訳じゃないからね！」

~~~~~

ナスカ級艦内、メイリン自室

「ふう……ん……」

小奇麗に纏められた部屋の中央にある椅子に座ったメイリンが、そんな声と共に伸びをした。彼女の正面にあるのは1台のパソコン。今回はそのディスプレイに映し出されているチャットの内容をココに記そうと思う。

~~~~~

HN：オペレーターの鷹

こんにちは。何時も愚姉共々お世話になっています。

HN：元・超兵1号
こんにちは。アレ？ お姉さんは？

HN：ジエニスマイスター
言われてみれば…… オペ鷹1人って珍しいわね。

HN：オペレーターの鷹
実は先日、姉は私達と共にGを相手にしたんですが負けてしまいまして……。その際に大事に強化していたMSも破壊されたせいで酷く落ち込んでいるんです……。

HN：ジエニスマイスター
それは凹むわね……。凄く大事にしてブログで公開してた位だもの……。

HN：元・超兵1号
そうだったの……。何て言えば良いか分からないけど、『私達は何時でも力になるから』と伝えておいてくれますか？

HN：オペレーターの鷹
元・超兵1号さん、ありがとうございます！ 愚姉にもそう伝えておきます！

HN：エアリーズなファイア
しかし軒並みレベル70を超える改造を施した彼女のMSが破壊されるとは……。取り敢えず経緯を知りたいのだが教えては貰えないか？

HN：オペレーターの鷹
分かりました！ それではまずこの動画を見て頂けますか？

h o o p : / / d e b a n h o s h i i . n u k o n u k o . z a
f t

HN: ジェニスマイスター
分かったわ。

HN: 元・超兵1号
了解。

HN: エアリーズなファイア
了解した。

~~~~~  
~~~~~

5分後、メイリンが観る様に言った動画（自分達とフリーダムの戦
闘の一部始終を映した物）を全員が見終わって

HN: 元・超兵1号

コレは……何と言うか反則の領域ね……

HN: ジェニスマイスター

執拗にガロードを追い回した私が言えた立場じゃないかもしれな
いけど、えげつないわね……。って言うか戦闘中に機体乗り換える
のはありなの？

HN: エアリーズなファイア

乗換自体はルール上合法だ。しかしこの場合、相手方のフリーダムの運と言つかタイミングが良過ぎるな。

HN：元・超兵1号

やらせ、と言う事ですか？

HN：エアリーズなファイア

いや、フリーダムを支える側がこうなる事を事前に想定して周到な準備を重ねていたと言うだけの事だ。負けそうなタイミングで出て来られる位だからな。

HN：オペレーターの鷹

成程……。

HN：ジェニスマイスター

そう考えるとあのデコやるわね……。こうなるだろうと想定してレベル99のガンダムを用意してたんだから。

HN：元・超兵1号

いや、デコって……（汗）

HN：愛のフラッグファイター

失礼。私用で遅刻した。

HN：オペレーターの鷹

あ、愛フラさんこんにちは！ お久しぶりです！

HN：愛のフラッグファイター

久しいな、オペ鷹。ところで君の姉はどうしたのだ？

HN：オペレーターの鷹
それなんです。が実は先日、姉が私達と共にGを相手にしましてその件で……。

HN：愛のフラッグファイター
何、ガンダムだと！？ もしや私がスパロボで出張っている間にあの少年が！？

HN：ジェニスマイスター
食い付き方（笑）少し落ち着いたら？

HN：オペレーターの鷹
いやいや、そっちのGじゃないですよ！（汗）

HN：愛のフラッグファイター
ム……済まない。少々取り乱した。どうにもスパロボで出演するタイミングが悪かったせいか相手をして貰えなくてな……。

HN：元・超兵1号
確かに1人だけ49話の登場でしたからね。アレは正直出番の割り振り方がおかしいと思います。

HN：エアリーズなファイア
まあアレは相手をさせられる側の負担を考えた結果なのだろうかな。アレだけ疲弊した所で愛のフラッグファイターは荷が重いからな。

HN：ジェニスマイスター
脱線してるから話を戻しましょう。取り敢えず愛フラ、オペ鷹が上げたこの動画を見てくれる？

h o o p p : / / d e b a n h o s h i i . n u k o n u k o . z a
f t

HN：愛のフラッグファイター
了解した。しかと目に焼き付けさせて貰う。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

更に5分後

HN：愛のフラッグファイターさんが退室しました。

HN：オペレーターの鷹  
何事!?

HN：元・超兵1号  
愛フラさん!?! ドコに行ったんですか!?!?

HN：ジェニスマイスター  
ああ、やっぱりこうなった……。と言うかストライクフリーダム  
の場所が分かるのかしら?

HN：エアリーズなファイア  
見せん方が良かったな……。まああのMS版不動明王をフラッグ  
で墜とせるとは思わんが。

HN：オペレーターの鷹  
不動明王ってそれなんてゴッドマーズですか（笑）まあ確かにパ  
ンクを多用してるって意味では似てますけど。

HN：元・超兵1号

取り敢えず、ソーマと協力してストライクフリーダムを攻略する  
糸口を調べてみますね。

HN：オペレーターの鷹

元・超兵1号さん、ありがとうございます！

HN：エアリーズなファイア

では今日は一端退室して、何か見つけたらこのチャットに書き込  
む事としてよ。。

HN：ジェニスマイスター

了解。それじゃあね。

HN：オペレーターの鷹

今日はどうもありがとうございました！

HN：エアリーズなファイアさんが退室しました。

HN：ジェニスマイスターさんが退室しました。

HN：オペレーターの鷹さんが退室しました。

HN：元・超兵1号さんが退室しました。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「ちゅ、と」

一通りやり終えた後でパソコンの電源を切ると、メイリンは席を立って部屋を出た。

さし当たったの仕事である、凹んだ姉を奮い立たせると言う大事な仕事を為すべく。

第8話「テンションって意外と簡単に上がったたり下がったりする」(前書き)

読む上での注意

- 1 ・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですw
- 2 ・と言うか他のキャラも崩壊していますwww
- 3 ・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですwww
- 4 ・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
- 5 ・字数少な目です。物足りないかもしれません。
- 6 ・作者のネタが枯渇して来たので駄文です。

以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を
お願いします！

第8話「テンションって意外と簡単に上がったたり下がったりする」

「これまでの粗筋　世界の3分の1を制する超大国『ガンダニア』の忘れられた皇女ルナマリア。超常の力『ザフト』を手にした彼女は、普段は『MS学園』唯一の女生徒として平凡な逆ハー生活を過ごしながらその力を使って彼らに反逆する。全ては、大事なモノアイの為に　」

「だから粗筋を他の作品から丸パクった上に雑に扱うなああッ！
！！ スイマセンおりむーさんにルルーシュさん！」

~~~~~

メイリンがチャットでやり取りをしている頃

「うっ……」

ナスカ級艦内に備え付けられた自室の中で、ルナマリアは1人部屋の隅で体育座りをして落ち込んでいた。その雰囲気は非常に暗く、どんよりとしたオーラが彼女の周囲を覆っている錯覚さえ見る者に与えていた。良く見ると彼女のチャームポイントであるアホ毛もしなっており、彼女の心情とそれがリンクしていると言う疑いの無い証拠を提示していた。

「あんなの反則じゃない……。壊した瞬間に次の機体なんて……て言うか人に育てさせるなんてマナー違反じゃない……」

ブツブツとそんな独り言を呟きながら立ち上がると、彼女は部屋の中にある棚へと向かって行った。そしてそこにあっただ箱のうちの

1つを取り出すと、それを机に置いて紙で出来た蓋を開けた。  
そして。

「このッ！ このッ！ Gなんかッ！ Gなんかッ！」

左手で取り出したプラモデル 実物の100分の1サイズのフリーダムガンダムを机に置き、きつく握り締めた右手で何度も殴り付けた。その破壊力が凄まじかったのか轟音と共に機の表面が拳の痕を残して凹み、凹んだ箇所上半身と下半身が分かれたフリーダムが減り込んでいる光景が彼女の視界に映った。

「ハアッ……、ハアッ……」

荒い息を暫く吐くと少し落ち着いたのだろう、痛みが僅かに奔る右手を数回振ってから席に着いた。そして惨状と化した机の上に転がるフリーダムのプラモデルを再び箱にしまうと、ポツリと呟いた。

「虚しい……」

ガックリ項垂れながらそう言うと、ルナマリアは机に突っ伏した。同時に悔しさと無念さがぶり返したのだろうか、再びどんよりとした重苦しいオーラがそんな彼女を覆った。  
と。

「ん……？ メール？ 誰からだろ？」

不意に聞こえたメールの通知音に顔を持ち上げると、ルナマリアは怪訝な顔をしながら画面に視線をやった。

「え……？　嘘っ！？　私の作品が3位入賞してる！？」

メールのタイトルを確認すると同時、それまでちよつと突けば泣く事確定と言った風だった彼女の顔が向日葵でも咲いた様に明るくなった。それに合わせて彼女の背景役を担っていた瘴気と言っても良い程に陰気な空気は突風でも吹いたかの様に霧散し、代わりにピंकを基調として周囲が宝石の如く輝く何ともハッピーな背景に差し替わった。

「なになに……」水陸両用と言うズゴックの概念に囚われないデザートカラーのズゴックと言う斬新な発想にセンスを感じました。これからも新しいガンプラの可能性を発掘して下さい………いやったああああッ！！！！！！」

メッセージを全て読み終えてから、ルナマリアは歓喜の咆哮と共にガッツポーズをした。1週間も掛けて完成させた作品が評価されて余程嬉しかったのだろう、彼女は満面の笑みを湛えたままエビ反り状態で天井に握り締めたままの拳を突き出すと言う体勢を丸1分維持すると言う凄いんだか凄くないんだか全く分からない身体の柔軟さを披露していた。

と。

「お姉ちゃん、入るよ………何やってるの？」

丁寧なノック音と共に入ってきたメイリンが、そんな硬度0なスネーク・ボディを披露している姉を視界に入れてから第一声でそう発した。

「ちょっと嬉しい事があってね　それよりメイリン、フリーダムを倒す為の作戦を考えようと思うんだけど」

「え……あ、うん……そうだね……。じ……じゃあギユネイさん達を呼んで来るから先に行つててね……」

「りよ〜かい　なんちゃって〜」

妹からの（若干引き気味の）呼び掛けに対してバネ仕掛けの人形のような跳ね起き方をすると、ルナマリアは喜色満面にそう答えた。そんな今までと180度違った姉の表情と気持ちの悪いノリに対し汗を流しながら引き攣った表情で相槌を打つと、メイリンは踵を返して部屋を出た。

そして暫く歩いてトイレに入った後で、メイリンは只一言。

「一体何があつたのおおおおッ！！！？??」

彼女の尤もなツツコミに対する回答は、永久に無かった……

~~~~~

一方その頃、戦艦エターナルの一室

「あ、俺の作った100分の1『サイコ・ハロ』のプラモがグランプリで優勝してる」

「おめでとうアスラン！　3時間で完成させた作品で優勝するなんて凄いやー！」

「ありがとうキラ。ついでに朗報だ、賞金が10万手に入る」

「ホント！？　やった！　コレで水と塩と砂糖だけの生活から脱却出来る！」

「ラクスには内緒だぞ。バレたら『コードギアス』シリーズのDVDの購入資金に消えるからな」
「う、うん……」

こんな会話が為されたとか為されなかったとか……

第8話「テンションって意外と簡単に上がったたり下がったりする」(後書き)

SDガンダム Generation World を未ブ
レイの方への解説

ズゴック

型式番号：M S M 07

機動戦士ガンダムに登場したMS。

ジオン公国軍の水陸両用量産MSで、ジオン公国製MSの中でもトップクラスの完成度を誇る主力機体の1つ。

ゴッグと比較して20t程軽量な上にそのパワーは従来のジオン軍のMSと比べて『段違い』であった。また装備している推進システムに因って水中は元より陸上でさえザク?を凌ぐ程の機動性を有していた。

因みにシャアリアズナブルが赤く塗った本機を駆ってビームを回避しつつクローの一撃でジムを破壊したシーンは有名である。

武装は頭部に装備された240mmミサイル(装弾数30発)と中央部にメガ粒子砲を内蔵したアイアン・ネイル。

サイコ・ハロ

型式番号：H A R O 862

SDガンダム Generationシリーズに登場するオリジナルの機体。

ガンダム世界のマスコットであるハ口そっくりのデザイン（但し機体は真っ黒で、目つきも悪い）が特徴的。

ゲーム内でもトップクラスの凶悪な性能を誇っており、並の機体では勝負にすらならない。

当然武装も凶悪でドリルとメガ粒子砲を仕込んだアームと両目から放たれるメガ粒子砲に加えて内部には圧倒的と言える量の『ハ口・ビット』（本機体と瓜二つの外見・小型）も内蔵されている。

開発者・用途を含め、知る者は誰もいない……

第9話「『大丈夫だ』と言う言葉程信用ならない言葉は無い」（前書き）

読む上での注意

- 1 ・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですW
- 2 ・と言うか他のキャラも崩壊していますWWW
- 3 ・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですWWW
- 4 ・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
- 5 ・字数少な目です。物足りないかもしれません。
- 6 ・作者のネタが枯渇して来たので駄文です。
- 7 ・暑さで作者は故障しています。その為訳の分からない事が書いてある可能性大です。

以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を
お願いします！

第9話「『大丈夫だ』と言う言葉程信用ならない言葉は無い」

「これまでの粗筋 強力な力を持つフリーダムストライクフリーダム・アルティメットのMS破壊コンボを受け、己の手札の殆どを失ったルナマリア。そこへ追い討ちを掛けるかの様にキラ^{II}ヤマトの切り札攻撃自由究極機がフィールドに召喚される。窮地に陥ったその時、とある一手が彼女の頭に

「何処の遊 王!? ルールが分からなくなって途中から完全に放棄した作品を使うなああッ!!!」

~~~~~

「と、言う訳で」  
<何が』と、言う訳で』なの。わけがわからないよ>

漆黒の闇が支配する空間の中に佇むMSのコクピットでふと呟いたルナマリアに対し、通信を介して何処ぞのマスコットもどきの如くメイリンが突っ込んだ。その表情は疑問符に満ちており、説明を求めているのは明白だった。

「ホラ、あの後色々あったじゃない。悪魔に魂を売った黄金のザクヤその部下のザク六騎士と死闘を繰り広げたりマッドドクターの造った『ぶるあああ!!!』なアップサラスとプラントを賭けて戦ったり、嘔吐きな羊紳士や 馬勇次郎な破界の王と宇宙分け目の合戦をしたり」

<止めてくれない!? ウソと事実をごっちゃにして話すの止めてくれない!? て言うかセ と後ろの2つは兎も角、悪 將軍とかネタが古過ぎて誰にも分かんないからね!>

「ノリが悪いわねえ……折角1ヶ月振りに出番が巡って来たのに」  
「もう良い……お姉ちゃんに期待した私が馬鹿だった」

盛大なボケに半ばキレ気味に突っ込みを入れるメイリンに対してメタな不満を零すと、ルナマリアは正面に視界を移した。そこに佇むのは一般兵が登場する20機の『ザクウォーリア』とその中心に立つ2機のMS。鮮やかな真紅に彩られたプルツの『キュベレイMk ？』と濃い緑を基調に所々に黄色の配色の為された宛ら騎士の様な趣を持つギユネイの『ヤクト・ドーガ』が攻撃態勢に入っているのを確認してから、彼女は2人に通信を送った。

「2人共、準備は良い？」

「ああ、後はメイリンの合図を待つだけだ」

「こつちもOKだ。けどこんな訓練が本当にストライクフリーダム攻略の役に立つのか？」

通信越しに準備が完了している事を告げつつ、プルツは疑問を投げ掛けた。それに対してルナマリアは自信あり気に鼻を鳴らすと、当然と言いつつ続けた。

「あのGの必殺って言うて良い一斉射……それさえかわして懐に入れば私達にだって勝機がある事は分かったからね。だからこそそのザク20機とアナタ達2人のファンネルを組み合わせた一斉射をかわす訓練って訳」

「成程。けどプラントも気前が良いね。アタシ達の訓練用にこんなスペースを提供してくれるとはさ」

「ああ、それなんだけど」

「回想開始」

「もしもし済みません、メイリン「ホークなんですけど」  
「あ、えっと……。実はG対策の秘密作戦をウチの姉が考案しま  
して……。それで訓練に使うスペースの使用申請の方を……」

あんまりにスポコン漫画チック&amp;無茶苦茶な内容の姉の  
発想故に、『シミュレーションルームでやれ』と言う突っ込みが返  
って来るのを予想しながらメイリンがそこまで言葉を紡ぐと同時。

「わ、分かりました！ では少々お待ち下さい！ 今すぐ上を脅  
…基<sup>もと</sup>上とO H A N A S H Iして許可を取って来ますので！！  
！>  
「え？ え？ あ、ありがとうございます！」

〈回想終了〉

「って事があってね」  
「いや待て！ ちょっとって言うか結構待て！ 今上を脅すとか言  
ってたよな！？ 何だ今の職員！？ プラントは大丈夫なのか！？>  
「大丈夫よ。この間も出生率が少し上昇したって話だし」  
〈そう言う事じゃないだろうがああッ！！！！>

無茶苦茶なプラントの組織体制とまるでピントのボケたルナマリ  
アの反応に、プルツーは通信機を介して大声で突っ込んだ。

実はメイリンの相手をしたのはプラント内に暗躍する『ザフト軍・  
メイリン親衛隊』の構成員（22才・独身男）であり、常々『メイ  
リンの為なら喻え火の中ブルーコスモスの中』を座右の銘にしてい  
る人物。彼女からの（偶然とは言え）直々のお願い事とあって彼の  
テンションはメーターを振り切り、その気迫で以って上司にO H  
A N A S H Iして寝込ませて許可を取ったと言う経緯があるの

だ。何と言つか、プラントは本当に大丈夫なのだろうか？

「大丈夫よ、問題無い」

<ルナ、それ死亡フラグだぞ。と言つか誰に言ってるんだ>

「いや何か言わなきゃならない気がして。それはそうと早く始めましょう」

<そうだな。プルツー、行くぞ>

<……分かった、もう良い。突っ込まないから好きにしてくれ>

プルツーの半ば自棄になった言葉と同時にメイリンに合図が送られ、それと同時に壮絶な訓練の火蓋は切って落とされた。

因みに訓練終了後にプルツーは『原因不明の』胃痛に悩まされたのだが、その話は面倒臭……基プライベートな問題なのでココでは書くのを控える事とする。

第9話「『大丈夫だ』と言う言葉程信用ならない言葉は無い」（後書き）

SDガンダム Generation World を未ブレイの方への解説

ヤクト・ドーガ

型式番号：MSN-03

『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』に登場したMS。

シャアが総帥を務めた方のネオ・ジオンのMSで、ニュータイプ専用機と言うべき機体。開発はキラ・ドーガをベースとしたネオ・ジオン総帥『シャア・アズナブル』の専用機候補であるレーテ・ドーガを前身としている。しかしレーテ・ドーガでは総帥専用機とするには性能不足であるとして、「キラ・ドーガ サイコミュ試験型」を経て本機が開発される事になった。

基本フレームは一般兵用の量産機であるキラ・ドーガの物と同一であるが、大型ジェネレーターやスラストを追加する等の強化改装が行われた結果、キラ・ドーガとは別物と化している（尤も、反応速度等で一般兵を大きく凌ぐニュータイプが搭乗する事を前提にしているのだから当然ではあるのだが）。

加えて特徴的なのは、この機体に『サイコフレーム』と呼ばれるモビルスーツ用の特殊フレームが組み込まれている点である。これを搭載した事に因って基本性能が大幅に向上して誘導攻撃兵器『ファンネル』の搭載が可能になっており、ニュータイプ専用機としての高い機動性と攻撃力を得るに至っている。

パイロットは強化人間であるギユネイ・ガスと、ニュータイプの少女クエス・パラヤ。因みに2人の機体はそれぞれ配色と一部の武装が異なる。

ギユネイの機体は本編でも触れた通り黄色と深緑を基調とした配色で、頭部に指揮官用のアンテナがあるのが特徴。クエス機は赤と銀を基調とした配色（本来はシャアの予備機体であった為、この配色）。

武装はヒート・ナイフ付ビームサーベルと両肩部のアーマーの裏側に各3発ずつ計6発装備されたミサイルにビームアサルトライフル（ギユネイ機のみ。クエス機はメガ・ガトリングガン）と盾に仕込まれた4連装メガ粒子砲。そして両肩にマウントされた計6基のファンネルである。

ギユネイは作中搭載装備をフル活用してジェガン8機を瞬く間に撃墜したりラー・カイラムからアクシズに向け発射された核ミサイルを全て撃墜したりと活躍したものの、最期は力量で遥かに勝るアムロレイとガンダムに因って粉碎されてしまう。

因みに余談であるが、盾に準サイコミュと言うべきインコムを搭載する案があった。これはファンネルとの両立は難しいとの理由で見送られているが、どう考えてもニュータイプにわざわざインコムを使わせるのは……

第10話「分離合体なんてリアル戦場でやったら100%失敗する」(前書き)

読む上での注意

- 1 ・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですw
- 2 ・と言うか他のキャラも崩壊していますwww
- 3 ・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですwww
- 4 ・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
- 5 ・字数少な目です。物足りないかもしれません。
- 6 ・作者のネタが枯渇して来たので駄文です。
- 7 ・作者は？です。その為訳の分からない事が書いてある可能性大です。

以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を  
お願いします！

第10話「分離合体なんてリアル戦場でやったら100%失敗する」

「これまでの粗筋 9体のMSの力を取り込んで完全態へと変貌したストライクフリーダム。その圧倒的な力を前に苦戦するルナマリアであったが、その時彼女の身体へと新たなる力が

「粗筋の雑さに磨きが掛かっているんだけど!? て言うか何でオー!? ファンの皆さんから苦情来るからねコレ!」

~~~~~

ルナマリア達が最高に方向性を間違えた特訓をしている頃

「うーん……」

“歌姫の艦”

真実を知る人々には“宝船(笑)”とも陰

口を叩かれるその艦の食堂から、少女の唸る声が聞こえた。その美しい顔に備わった口元は僅かではあるが歪んでおり、彼女の心の中を雄弁に語っていた。

「『禁断の刃』……最近は特に面白くありませんわね……。作者が新人だとは思っても、コレだけワンパターンで稚拙な展開ばかりでは……」

そう呟くと同時、少女 ラクスIIクラインは左手に持っていた(本としての厚みも内容も)薄いそれを机に置いて食事を始めた。今日の献立は 秒チャージを謳い文句にしているゼリー状の飲料。ふと最近まともな食事を摂った記憶が無かったなど彼女は考えたが、自分はこうして体調も崩さず無事生存出来ているのだから大

丈夫と勝手に自己完結してからその話題を頭から追いやった。余談ではあるが良い子も悪い子も絶対真似をしてはいけない。やって良いのは悪い大人だけである。

「しかし、全世界モノアイ愛好会もやるものですわね……。私が一部を売ったが為にスペックダウンしたとは言えキラのフリーダムを破るなんて……」

さらりととんでもない事を呟くと、ラクスはその常識外れの行動に因って得た軍資金で入手したもう1冊の戦利品（せうりひん）へと手を伸ばした。そしてその1ページに書かれていたイラスト　蒼い髪の2人の姉妹拳士が強敵である拳士に対し怯む事無く向かって行くシーンを描いたそれを見て、右手の指で机を叩きながら思考に入った。

「ストライクフリーダムを出した以上負けは有り得ませんが、キラの最近の連戦を考えるとココは誰かに援軍を頼んだ方が得策……。ですが誰に頼むべきか……」

思考の半分を小説を読む事に、もう半分を誰に助けを求めるかを考える事に費やすと言う器用な真似をしながら、彼女は考えを巡らせる。その顔は真剣その物であり、とても自分達の予算をアニメや漫画・ライトノベルに使い込む暴君と同一人物には見えなかった。そうやって暫く沈思黙考してから、彼女は

「ソレスタルビーイングは……ダメですわね。私がフリーダムの一部を質に入れた事がバレればG好きの彼が暴発しないと限りませんし」

自業自得じゃないか、と突っ込まれる事必至な台詞を呟きながらラクスは自分の案を却下する。と同時に彼女の脳裏にシャッフル同

盟とターンAの姿が浮かんだが、何れも良く考えてみると自分達の影が薄くなるのでそれも却下した。ラクスクライン、注文の多い黒幕である。

「やはりココは“私の趣味に理解のある方”で、尚且つ私の恐か…
…こほん。O H A N A S H Iをちゃんと聞いて下さる方に
すべきですわね。となると……」

自分にとっての同志ナカマであり、年に1度（自己申告）の己の悪行を黙認してくれる数少ない人物数人を頼る事にした。

その人物とは

~~~~~

一方その頃、アホ……ルナマリアは

「あ、あ、ん!？」

「!?!? ルナ、どうした？」

不意に顔を怒りに歪め、アホ毛を震わせながら天井にその視線を向けるルナマリアを見てギユネイが問うた。ルナマリアはそれに対して表情を戻しながら彼の方へ向き直ると、ゴメンゴメンと言いな  
がら取り繕う様な笑顔を浮かべた。

「何かムカツとする声が聞こえたから。それよりさつきはありがとう」

「気にするな。お前程じゃないけど俺もガンダムには恨みがあるからな。アレがフリーダムを倒す一助になるんなら幾らでも協力する

さ

ルナマリアのお礼にそう返すと、ギユネイは汗を拭いてから手元のボトルの中身を飲んだ。その視界には特訓で先程まで使っていた彼らの機体が悠然と佇んでおり、整備士達が急ピッチで己の責務を全うしていた。

「ガンダムだからと言って優れてると決まった訳じゃない。それを次こそ、俺達の手で以って証明してやるんじゃないか」

「そうね。コレだけのメンバーが揃っているんだもの。頑張りましょう！」

改めてモチベーションを上げて、ルナマリアがそう答えた瞬間。

<お姉ちゃん！ 6時の方向から敵機が！ 数は……戦艦1隻とMS1機！？ コレは……！>

けたたましいアラートと同時に、悲鳴に近いメイリンの声が響いた。その声は驚愕の色を多分に含んでおり、彼女が大いに動揺しているのは明白だった。

「メイリン！？ 敵がどうしたの！？」

動揺する彼女に対し、ルナマリアは問うた。それに対してメイリンは

<イ、インパルス……！ インパルスとミネルバが！>

衝撃的な返答を付き付けた。

## 第11話「主人公って人気投票だと案外順位が低かったりする」(前書き)

### 読む上での注意

- 1 ・ルナマリアが酷いキャラ崩壊を起こした駄文ですw
- 2 ・と言うか他のキャラも崩壊していますwww
- 3 ・ガンダムタイプは敵としてのみ登場予定ですwww
- 4 ・作中で述べられている意見は作者の意見ではありません。
- 5 ・字数少な目です。物足りないかもしれません。
- 6 ・作者のネタが枯渇して来たので駄文です。
- 7 ・作者は？です。その為訳の分からない事が書いてある可能性大です。

8 ・今回初登場の彼は      コンですwwwまあ原作でもうわ何をする止めry)

以上を踏まえた上で『まあ読んでやるか』と言う方、感想・指摘を  
お願いします！

## 第11話「主人公って人気投票だと案外順位が低かったりする」

「これまでの粗筋 7人のパイロットが己の召喚したMSを使い、万能の半額弁当『月桂冠』を奪い合うベン・トー戦争。適当に行った召喚術に因って最後のMSを召喚したルナマリアはそんな戦争には目もくれずにモノアイ集めに没頭し

「何かファンから無茶苦茶怒られそうな悪魔合体が成立してるんだけど！ て言うかお姉ちゃんのポジションはアスランさんがやるべきでしょ中の人的に！」

~~~~~

ナスカ級がミネルバとインパルスを確認する少し前

「まさか久しぶりのインパルスの相手がルナとはね……」

常の通り整備担当のクルーの喧騒が遠方で響く格納庫の中で、シン「アスカはポツリと呟いた。紅い瞳で己のコレから駆る機体を見遣るその表情からは心無しか憂鬱さが感じられ、あまり乗り気でないのだと容易に窺い知る事が出来た。

「全く、何で俺がこんな任務を……。でも議長の名前だけなら兎も角ラクス様の名前も指令書に書いてある以上、逆らったら只じゃ済まないしなあ……」

今回彼に課せられた任務は、要約すると『掃除担当の任をサボったルナマリア』ホークとメイリン』ホークを捕縛しプラント最高評議会議長たるギルバート』デュランダルに引き渡せ』と言うモノ。

小学生じゃあるまいし何でこの年になってこんな事を公式の任務としてせねばならないのか。そもそも何で軍属でありながら何処そのスイッチを使う仮面の戦士の様に非公式な部活動に熱中し必要な書類の提出をすっぱかしたり掃除をサボったりする馬鹿共を回収する為に、自分の憩いの時間　趣味に耽溺する時間以上に大事な最愛の妹とのストロベリートークタイムを潰さなければならぬのか。そう考えると彼の呆れと嘆息の意味も分かるハズである。

今何か不穏な単語が過ぎった気もするが、それは気のせいと言う事にして欲しい。兎も角脱力感が半端無い任務なのは分かるだろう。事実彼は命令が下ってから今までの小一時間、偏頭痛に悩まされている位なのだから。

だがそれでも、彼はこの任務を断る事は出来ないのだ。

「ラクス様、身体が理不尽で出来てるからなあ……。議長なら兎も角、逆らうと丁寧に O H A N A S H I された上で“布教”の為に半日拘束されるし……。はあ……」

以前妹とのストロベリートークを理由に逆らって実体験しているが故に、それがどれ程の愚行か容易く理解出来るからである。まあ些かどころかかなり問題のある理由での　謂わば自業自得の自滅だが、それでも同じ失態を繰り返す程シン「アスカは子供でも白痴でもない。故に不承不承でありながらも、彼は早々に厄介事を片付ける事を決断したのだ。決して早く妹と話したいからではない、絶対無い。

「言っても仕方無いか。ルナならインパルスでも十分倒せるし、手早く倒して質に入れられ……。げふんげふん。修繕の為にラクス様に預けてるデステイニーを取り返さないとな」

己の目的を呟きつつ決意も新たに黒の宇宙を見据えると、彼は己

の乗機へと無重力故の軽やかな動きで向かって行った。

(マユ、待ってるよ。すぐに生フル・ウェポン・コンビネーションを見せてやるからな)

一言言わせて欲しい……………何故こうなった、主人公。

~~~~~

時間は戻ってナスカ級

<おーい聞こえるかルナにメイリンとその他諸々ー。今から投降しろ、さもないとこのブラストインパルスが火を噴くぞー>

<何そのいきなりな問答無用アタック!? って言うかもう撃つてるし!>

「わわッ!? メイリン揺らさあ痛ッ!!!」

「おいルナ、大丈夫か!？」

「だ………… 大丈夫よ…………。問だ…………痛たた…………」

「いや、その状態でネタに走る必要無いだろ」

棒読みの宣告と同時にインパルスガンダム 厳密にはその

内の対艦攻撃・火力支援仕様の形態『ブラストインパルスガンダム』から放たれたビームの雨に因ってナスカ級はいきなり窮地に追い込まれていた。どうにか射撃はメイリンの行ったスプリットSやインメルマントーンと言った神技でかわし被害を約1名に留めたが、艦内の混乱ばかりは流石に防ぎ様が無かった。決して上の台詞から余裕だなどと邪推してはいけない。

「よ、よくもやったわねシン…………! メイリンにしかぶたれた事無

いのに！」

「ぶたれた事あるのか妹に……いやまああるか、お前だし」

頭に出来た特大のたんこぶを抑えながら涙目で唸る彼女を見て、駆け付けたプルツーが呆れた様子で呟く。そんな彼女を余所に、シンとメイリンは通信越しに言い合いをしていた。

<だから私はサボったんじゃないやなくてサボらされたんだってば！ お姉ちゃんの性格知ってるでしょ！>

<残念でした。オーブには一蓮托生って言葉があります。と言うかお前とルナは2人揃って1人前だから、連帯責任です>

<何それ！？ 私は別にお姉ちゃん専属の突っ込み要員じゃないからね！ て言うか私だけはまともだし！>

<それが周囲の認識ってヤツだ。士官学校時代、皆影でお前達の事を漫才姉妹って呼んでたぞ。……レイモ>

<待てやコラ。言っただけ良い事と悪い事ってモンがあんただろうが！>

とんでもなく納得の行かない台詞を突き付けられ、普段使わない粗暴な言葉でメイリンが怒りの咆哮を上げた。同時に振り下ろされた握り拳に因ってモニターが破断し、シンの姿を強制的に遮った。

と、その時。ルナマリアから彼女へ内線での通信が為された。

「メイリン、コード『Love Destiny』を使うわよ。あのシスコンに私達の恐ろしさを思い知らせてやるわ」

最高に良い笑顔でルナマリアの発した言葉に、メイリンはOKの2文字で以って応じた。

第11話「主人公って人気投票だと案外順位が低かったりする」（後書き）

SDガンダム Generation World を未ブレイの方への解説

インパルスガンダム

型式番号：ZGMF X56S

『機動戦士ガンダム SEED DESTINY』に登場したMS。

ザフト軍の試作型MSで、セカンドシリーズに分類される機体。従来のMSと大きく異なる特徴的な分離構造をしており、上半身を構成する「チエストフライヤー」・下半身を構成する「レッグフライヤー」・コックピットを構成する「コアスプレnder」の3つのパーツから成り立っている。

97

更にこの3つが合体する事で成立する本体に換装式バックパック「シルエット」を装着し、計4つのパーツが合体して完全な戦闘運用形態となる。

その形態は以下の通り。

中近距離戦闘を想定した機動力強化用のシルエット「フォースシルエット」を装備した形態である「フォースインパルス」

対MS格闘戦を想定した格闘戦用シルエット「ソードシルエット」を装備した形態である「ソードインパルス」

対艦攻撃・火力支援を想定した火力強化用のシルエット「ブラストシルエット」を装備した形態である「ブラストインパルス」の3つ。因みにインパルスはシルエットの搭載武装のみならず、形態を問わず使用可能な基本武装を装備している。その為シルエット交換時も携行火器を変更する事無く、迅速な戦線復帰が可能。

上記のコンセプト上ありとあらゆる作戦に対応可能である上に、機体の上下半身パーツであるチェストフライヤーやレッグフライヤーが重大な損傷を被つてもコックピットユニットであるコアスプレnderが健在であればそれらのパーツを換装する事で即時に戦闘を継続する事が出来る。また、このシステムにより副次的にパイロットの生存性も向上している。

また、これらのシステムを逆手に取ってフライヤーをミサイルのように射出する攻撃を披露した場面もある。その際にはミネルバから予備が直ちに射出され、戦闘を継続した。

更なる機体の特性として挙げられるのは「デュートリオンビーム送電システム」であろう。これはニュートロンジャマキャンセラーを禁止するユニウス条約に因って核動力を封じられた事への対抗策的に生み出されたシステムで、デュートリオンビームと呼ばれる粒子線を対象となる機体の受信装置（頭部アンテナ）に照射する事で母艦に着艦する事無く速やかにエネルギーの補給を行う事を可能としたモノで、事実上活動可能時間を無限とする驚異的な物である（但し受信時には支障が出ない様静止しなければならず、その間は完全な無防備となる。また当然であるが実弾や推進剤は着艦して補充しなければならぬ）

本機に3つのパーツからなる分離・合体機構が採用された理由の1

つとしてユニウス条約に規定された「MSの保有数の制限」の規制をパスする目的がある。これはインパルスを「1機のMS」では無く、合体してMSとして“も”運用出来る「3機の航空機（航空機）」と位置付ける事で制限された機体数以上のMSの保持を条約違反に値させない為と言う政治的要因の措置に因るモノである。

主な搭乗者であるシン・アスカはこの機体の特性をフル活用し、パイロットとしての練度で勝るキラ・ヤマトとフリーダムガンダムを翻弄・撃墜しネビュラ勲章を得た（余談であるが前回のネビュラ勲章受章者はアスラン・ザラであり、彼もまたキラ・ヤマトを撃墜した事でコレを得ている）。

後にシンが後継機であるデステイニーガンダムを受領した為に本機はルナマリア・ホークが引き継ぐ事になる。彼女はシン程機体を乗りこなしていたとは言いが、それでもデストロイガンダムの撃破や大量破壊兵器「レクイエム」の破壊を成し遂げる等一定の戦果を挙げている。

最後はメサイヤ攻防戦でアスランのインフィニットジャスティスガンダムに挑むも、パイロット・機体性能共に劣っていた為に為す術無く戦闘不能に追い込まれる。

総じて見るに継戦能力と汎用性の高い機体であると言え、技量の高いパイロットが操ればかなり凶悪な機体である。反面その継戦能力の殆んどが専用運用艦であるミネルバ頼みであり（予備のシルエット・デュートリオンビーム送電システム）、ミネルバを落とされた際の戦力低下の度合いは他の機体以上に大きいと思われる。

他にもユニウス条約の形骸化や分離・合体機構、VPS装甲に因る機体構造の複雑化や整備性の低下に高コスト化などの問題があった

為に多大な戦果にも拘わらず量産化はされなかった。

各形態毎の武装は以下の通り。

インパルスガンダム

MMI - GAU25A 20mmCIWS：胸部に2門内蔵されている。

M71 - AAK フォールディングレーザー対装甲ナイフ：両腰部に2本収納されている。

MA - BAR72 高エネルギービームライフル

MMI - RG59V 機動防盾

フォースインパルスガンダム（換装時の追加兵装）

MA - M941 ヴァジュラビームサーベル

ソードインパルスガンダム（換装時の追加兵装）

MMI - 710 エクスカリバーレーザー対艦刀×2

RQM60 フラッシュエッジビームブーメラン

ブラストインパルスガンダム（換装時の追加兵装）

M2000F ケルベロス高エネルギー長射程ビーム砲

MMI-M16XE2 デリユージー超高初速レール砲

GMF39 四連装ミサイルランチャー（AGM141 ファイヤ  
ーフライ誘導ミサイル）

MA-M80 デファイアントビームジャベリン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8311r/>

---

【習作】SDガンダム G Generation World ~ 逆襲の赤き鷹 ~

2011年11月16日14時06分発行